

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

蛤

姫（上）

佐藤家の昔話（八）

編 武 田 正

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

蛤

姫（上）

佐藤家の昔話（八）

編 武 田 正

蛤 姫 (上)

佐藤家の昔話 (八)

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
和尚と狸	ねぎ違い — 愚か村話 —	みかんの芽	樺の和尚	吠狐	ねずみと和尚	舐めくらべ	芋太郎	蛤姫	関所役人	成木責め	むけの朔日	高松の仁王さま	葛の葉の子別れ

42	39	36	34	31	28	26	25	15	14	13	12	9	4
28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15
小僧持念	日本武尊	須佐男命	因幡の白兔	猿の尻はなぜ赤い	嫁と卒塔婆	雀のふくべん	不思議な織物	効き鼻	小判産す大黒さま	さいわいの化けもの	金持ちと托鉢僧	笛吹き童子	三枚のお札

82	81	79	77	72	66	64	61	58	57	54	51	49	44
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29
 見るなの座敷
 天人女房
 八郎太郎
 千里の靴
 鼻の中から豆二俵
 三人のほら吹き
 嘘つきの災難
 まま子の豆
 狸の八畳敷
 狼千匹
 ほら吹き
 嘘つき息子
 泥棒治す薬
 藤蔓のこぶ
 狐と田螺
 平林
 熊の忠告

123 121 117 113 112 109 108 106 103 102 101 97 94 92 90 86 84

60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46
 安達が原の鬼婆
 仙人と小間物屋
 ダバロク
 どぶろく造り
 酒飲み
 継母と白鳥
 仁王
 阿弥陀と釈迦
 月・日・雷
 雨の降る孔
 上と下の白
 生療法は怪我のもと
 阿古屋姫
 貧乏人の大金
 こうもり

152 149 147 144 142 139 139 138 137 136 135 134 132 130 128

1 葛の葉の子別れ — 狐女房 —

310

むがし、摂津の国に安部保名という侍がいだっけど。心のやさしい、思いやりのある武士だけど。

あるとき、保名は数人の侍を従えて信太明神さまをお詣りに行つたんだ。ほしてお詣りがすんでから、この辺で紅葉見物でもして行くべえというわけで、一行で幕を張つて、あたりの景色を眺めながら、酒盛り始めだんだど。したればほのとき、外の方が急にわあわあていう声がしたと思つたれば、一匹の白狐が尾っぽ股にはさんで逃げてきて、きよろきよろしながら、保名の膝の上さ飛び上がつてふるえていだっけど。

間もなく、近くで狩りがあるらしく、勢子^{せこ}が息をきらしながら、

「今、ここさ白狐逃げてこねがったが」
て聞かつたんだ。保名は、

「狐なの、来ねがった」

て。して、

「何だ、勢子の分在で、侍の幕内をのぞく」

とて、さあ今だ、安全な処さ逃げろて言うて、白狐ば放してやったんだど。保名たちがせつかくの酒盛りも勢子に乱さつで、つまんねぐなてはあ、幕をしまいはじめだれば、石川恒平という侍が百人ほどの家来を連れてきて、おれの狩りの邪魔したというわけで、伐り合いになって、多勢に無勢、とうとう保名が縛らつでしまつて、いま少しで殺されそうになつたんだどはあ。したればほの時、どこからともなく年取つた坊さんが恒平の前さ立ちふさがつて、

「待て、待て、わしは藤井の頼範だ」

て言うたれば、

「おう、これはこれは和尚さま」

藤井寺ていえば恒平の祖先からのお墓が祀らつているお寺さまだほでに、頭が上らねんだけど。

「信太明神にお詣りに来たお人に乱暴はなりません、おやめなさい」

て言わっで、和尚の言葉にそむぐわけにいかねくて、保名ば解き放して、さつさと消えで行ってしまったんだどはあ。

保名だ、和尚さまさ頭をさげて礼をいって、頭ば上げて見だれば、和尚さまの姿はなく、一匹の白狐が熊笹かき分けながら、藪の中さ入って行くのが見えただけど。

「さては、さっきの白狐が和尚に。不思議なこともあるもんだなあ」
て思っでいだんだけど。

さっきの激しい争いで傷がうずき、口も乾いだんで、水を求めて谷川さ降りで行ったれば、ほこさ一人で娘が洗濯していだんだけど。ほして娘がいきなり保名に走り寄って、

「お侍さま、大へんなお怪我で…。私の家はこの近くだから…」
ていうわけで、言われるままに、お世話になたんだどは。保名は今度大丈夫になつたから、お名前を聞いて御礼をいうて帰ろうと思っで、

「お名前は何とおっしゃるんですか」

て聞いていただれば、

「葛の葉と申します」

保名はまだ一人者だったから、ほの親切がわせらんなくて、さしつかえなかったら、おれの嫁になって下さらぬか、血なまぐさい武士より、この家で静かに百姓などして一生過したいと思つて、葛の葉も喜んで、お側さ置いてけらっしゃいというわけで、二人は夫婦になつてしまつただけ。

ほして三年目に玉のような男の子が生まつて名前ば、安部童子て付けだんだど。

ある春の日ながのこと、童子が遊あそんで家さ帰ると、お母さんが機織り台の上で昼眠したんだけど。ところが何と着物の裾から白い尾っぽが出はつていだんだけど。童子がぶつたまげて、

「お母ちゃん、尾っぽ、尾っぽ」

ていうたんだど。

実は、この葛の葉は、元、信太の森で保名に助けらつた白狐だったんだけど。

ほして葛の葉はしばらくうらめしそうに童子の顔を見てまもなく思い出したように、おれの気のゆるみだったなあて思つて、ほして硯箱もつて、障子さ、すらすらと歌書いだんだど。

恋しくば尋ねきてみよ和泉なる

信太の森のうらみ 葛の葉

書き終ると輝くような美しい白狐に変身して、谷川の上の方に行つてしまったんだどはあ。

まもなく、野良から戻つてきた保名が童子の話をきいて障子の歌を読んで悲しんだんだど。「やつぱり」。

お母さんに会うだいて泣き叫ぶ童子は連^せですぐ信太の森さ出かけて見だんだど。ほうしたれば、葛の葉が元のお母さんの姿で現われ、保名さ黄金の箱と水晶の玉を呉^けで、言うたんだど。

「この箱の中さ不思議なお札が入つていで、お札を見ると、天地のこと、世のこと、人の命のことがよくわかるし、まだこの水晶の玉ば耳に当てれば、鳥や

けもの、草木の言葉がわかるから、息子が大きくなったら、形見の品としてお渡ししてけらっしゃい」

て言うて、何べんもふり返って、木立の中さ姿を消してしまっただのはあ。

やがて童子は後に安部晴明と名ので、一条天皇に仕え、暦や占い、天文学者になたけど。どんびんからりん、すっからりん。

2 高松の仁王さま

311

むかしむかし、高松のお観音さまの門前に、お仁王さまいだった。

んで、相撲とりも仕切りして立つときは、〈阿^{あうん}伝〉の呼吸ていうて、「ア」て言うなど、「ウン」て言うなど、二人のお仁王さま居だった。

そのお仁王さま、右と左のお仁王の呼吸が合うことを〈阿^{あうん}伝の呼吸が合うて、昔から言っただ。ところがその「ウン」の口の格好したお仁王さま、ちよいちよ

い夜中に出はって悪さする。我鬼べらをおどしたり、それから馬、魂消らしえだり、いろいろ悪さする。村人は、

「こりや、征伐さんなね」

て考えっただげんど、

「何せ、相手はお仁王さまなもんだから、征伐するなて言うわけに行かねし、困ったもんだ」

そういう風に考えっただ。ほしたらば一人の頓智のある若者が、

「んだら、おれ行つて征伐して呉^ける」

て、ある晩行つた。ほしたればお仁王さまとパツタリ行き会つた。お仁王さまいきなりその若者ば押えつけて、丸べて吞んでしまった。

「いや、こりや、吞まつでしまった。困ったもんだ。なぜかして脱け出すしなねべえ」

ど思つていたれば、何だか腹の中に紐^{ひぼ}みたいなぶら下がつていだっけ。はいつ一本、ちよいつと引張つてみだれば、ケクリケクリで、シャックリ始めた。「ははあ」。

こんど別の方の紐引張つてみたれば、今度は「ハクシヨン」で、アクションした。こんど少し長いのがあつから、そいつ引張つてみたれば、ブウッなて屁たつた。「へえー、こりや、ここでこりや、体のこと命令してんなだな」

と思つて、ほしてその人は高松で紙漉きなもんだから、懷さ小刀忍ばせつたつたど。ほしてほの小刀で、じゅぐじゅぐどここかまわす刺したら、「痛たた……」で、苦しみ始めた。ほして一番短かいな引っこ抜いたら、ハクシヨンというけあ、鼻から出はつてしまった。ほしてお仁王さま、それから懲りて決して人さ悪さすねはあて。そして人の為になるというわけで、ハシカの番兵したり、百日咳の番兵したりして、今度人間さ仇し^{あだ}ねで益するようになったど。どんびんからりん、すっからりん。

3 むけの朔日

312

むかしむかし、むけの朔日というな、したもんだ。そいつ、どういいうわけかというど、蛇でも蟹でも、蚕でも脱皮する。剥^むける。人間も剥ける。

「人間、剥けるなてないべえ」

て言うたら、

「いやいや、ほうでない。われわれから見つど、蛇や蟹や蚕なにかいの剥^むける殻見えつけんど、彼らには見えねんだ。おらだのも剥けでつけんども、蛇や蚕から見つど、人間の剥け殻、桑の木さ、ふあつと引掛つたり、ほら、田んぼの田の草取りしつたどこさ引掛つたりして、剥け殻みな見えるんだ。はいつ何時ごろ剥けつかていうど、人間の、丁度今から暑くなつどき、六月一日ごろ剥ける。んだから、六月一日ば「ムケノツイタチ」て言う。むけるに難儀しねで、そろそろて剥けるように、トロロを食つて、氷水飲んでむける行事ば、昔から「ムケノツイタチ」て言うたもんだ。どんぴんからりん、すっからりん。

4 成 木 責 め

313

むかしむかし、今だらリンゴ、ブドウ、そういうふうな果樹いっぱいあつけども、昔はここの果樹というど、大体、柿にきまつたもんだつた。

んで、ほの柿、木ばりおがつて実みのらね木もたまにあつた。それが何故かて言うど、「正月中に成木責めていうて、ほの木をいじめて、成つか成らねか聞かねから実んねんだ」

こういうこと言つたもんだ。して、正月の新正月過ぎつど、家の旦那、山刀持なたつたり、斧まさかりもつたりして行つて、逆の方でトントンと叩いて、

「こりや、こりや、なるか」

ほうすつど、うしろの方で、奥さんが戸のかげあたりから、「なり申す、なり申す」て。「なつこんだら勘弁してやつけんど、なんねこんだれば、ぶつた伐つぞ、ええか」て、成木責めていうなしたんだけど。どんぴんからりん、すつからりん。

5 関所役人

314

14

むかしむかし、関所ざああって、関所通つどき、関所役人がいちいち攻めた。

「こりや、こりや、どこへ通る。ほら、どっちゃ行く」

一人の人は頓智ええ人あいで、馬さのつたまんま行つた。

「これこれ、どこへ通る」

ほうしたれば、

ばきやく
そくびよう

「馬脚、足病なれば、のりうちこめん」

て言うた。関所役人が何が何だかさっぱりわからね。

「わからねがら教えてけらしやい」ても癪だから、「通れ、通れ」て言うたて。

ほれから、こつちの方から、中山（上山市）の関所さ行つた。ところが、

「これ、これ、どこへ通る」て言うた。

ちゅうざん
べいたく
ぐない

「中山、米沢、宮内に通る」て言うた。ほうしたけあ、首ひねつたけあ、「通れ、

通れ」て言うた。

大分、むかしは頭のええぐない役人が多かったと見える。どんぴんからりん、すっからりん。

6 蛤

姫

315

むかしむかし、あるところに、シジラという人いだった。

して、ほのシジラという若者が非常に親孝行で、たった一人のおかちゃんばうんと扱ってめんどろ見だ。ところが来る年も来る年も作物うまく穫んねくて、なかなか百姓仕事もなくて困っておった。ほん時に、ほの、一策を案じた。

「ははあ、車の後押したり、畑うないの雇取りしたりするよりも、海さ行つて雑魚せめすれば、こいつあ、只ですむわけだ。よし」

ていうわけで、釣竿かついで、舟漕いで海さ行つた。ほして、ほっちゃ釣竿たらし、こっちゃ釣竿たれてみたげんども、昼間になつてもいっこうにひかね。不

思議なこともあるもんだ。ほだえしているうちはあ、いつか夕波がザバザバと漂ってきた。

「はあ、夕暮れの兆候だ。もう少しで暮れる。こだんだれば、こだんどこさ来ねで、車の後押ししたり、畑うない手伝ったりすつど、芋の一貫目や二貫目もらういがった。こりや。今日ばりは棒にふった。こりや」

なているうちに、急に釣竿重たくなった。

「はてはて、こりや不思議なこともあるもんだ」

と思つて、ひよいと上げてみれば、ゆらりゆらりと引掛つてきたのは、蛤一つだった。

「なんだ、こだな蛤か、蛤一つでは何ともなんね」

なて、ポインと投げた。ほうしたれば、また重たくなったから上げてみれば、またさっきの蛤だ。一度ならず二度も引掛るなて、また、はいつば取つてポインと投げた。「何かかかんねがなあ」と思つて、また釣竿たれて見たれば、またピクピクと浮き動いたもんだから、上げてみた。やつぱり蛤だった。

「んだなあ、何もないにや増ましたべなあ、なんぼ小っちゃこい蛤だて」

て、その蛤釣り上げて、舟の中き置いだれば、むつくりむつくりと、はいつあ
大きくなつたけあ、たちまちタライよりも大きくなつた。大きくなつたと思つた
れば、何だか紫の後光がさしたような気がした。そしたら中からきれいなお姫さ
ま出はつてきた。

「これは不思議なこともある」

と思つたれば、

「シジラさま、シジラさま、わたしば、ほの、あなたの妻にして下さい」

て言うたつて。

「いやいや、何か感じがいしてござつたの、んねが。おれは一介の水呑み百姓。
田も畑も持たね雇取りして、その日暮ししてるんだ。あなたさまみたいな人は、
天か、あるいは竜宮にお住まいになつてゐる人でないか。とてもとても妻なて、
ほだなわけに行かぬ」

「いや、ほでない。何とか一つお願いします」

なて言ううちに港についてしまった。

「んだらば、ここで待つてで呉^けらっしゃい。家さ行つて母親と相談して来っから」
ていうわけで、家さ行つておかあさんと相談してみたれば、

「ほだえ、あれだれば、家さまず一晚でもお泊め申せ」

て、こういうわけで、一番高いどこさ部屋とつて呉^けで、ほうしてほこさ入れることに相談なつた。んだらばていうわけで、浜辺さ迎え行つたらば、砂浜裸足で歩いて来っけど。ほしてこんど、シジラが、

「いや、もつたいない、素足では」

なて背負^{うぶ}た。背負て見たれば軽いこどつたて、これまた魂消た。背負^{うぶ}だか背負^{うぶ}ねかわかんねようだったて。ほして家さ来て、

「こういうわけだ」

て、お泊め申した。ほだいしているうちに、村中では、

「いやいや、シジラどこさすばらしい嫁さん来たどえ。何でも天人か、あるいは乙姫さまか、まだまだきれいなだど」

「ほう、ほんではおれも行って拝が申して来っか」

て、只も行かねで、みんな豆五升だ米三升だて持って行って、シジラの家どこさ置いて、ほしてみんな集ばって来ったて。んだからシジラの家では、食いものに不自由ないがったて。ところがお姫さま、ほんで何名付けたらええがんで、世間の人あ言うた。

「何でも、蛤から出はったそうだ。ほんでは蛤姫て呼ばんなねべな」

て、噂になつてだ。て、ほの蛤姫が、

「旦那さま、機織りこしやえで呉^けらっしゃい。機師こしやえで呉^けらっしゃい」
て。ほして言われるまま、すばらしい大きい機師、シジラが作ってやった。

次の日からトントンの、カラリ、トンカラリンで、機織り始めた。ほだえ大きい機、なぜして織るべ。ほしたら、ある夕方、トントンの、トントンで戸叩く。ほしたらば、ちよつと出はって見たらば、ほの海荒れて、何としても舟出さんねて言うから、

「何とか今晚一晩泊めて頂かんねべか」

ていう女がいた。ほしてはいつ、お母ちゃんと蛤姫と相談したれば、

「ほいつあ泊めらっしゃい」

と、ほうい風になつたつて。ほんで泊めることにした。

ところが、ほの頃、ちようど機が出来上がつていだつて。ほしたらほの女がどういうわけだか、二人して機師さ上がつたけあ、パタパタ、パタパタと機師から反物とりはずして行つて呉だつて。ほして取りはずし終つたか終んねうち、

「こんど風が止んだから、舟が出るよう」

ていう声聞えだつて。ほうしたけあ、

「おさらばでございます」

て言うて、ほの女、かき消すように居ねぐなつた。不思議なこともあるもんだていうわけで、ほいつを降ろしたれば、

「旦那さま、旦那さま、あした町に市場があつから、市場に持つて行つて売つてきて呉^けらっしゃい」

「かあ、すばらしいきれいな出来ばえだげんど、なんぼえ（に）売つて来^くつどえ

え」

「金、三千貫で売って来^くつどええ」

「金、三千貫なて背負^{たが}うも持くもさんねつだな。ほだえ高く買^う人いんべか」

て、強く言^やれるもんだから、ほいつかついで、ほして市場さ行^{った}。ところが、市場では、ほれ、見たことないから、みんな褒^める、みんなすばらしい、みんな買^いだい人ばっかりだ。

「値段、なんぼか」

て聞^{いた}。

「金、三千貫」

値段聞^{いて}、みんなびっくりした。買^わんね。とうとう売^んねくてはあ、はいつ、〈元落^ち〉て言うて、出^{した}人が持^{って}帰^ることになった。ほしてまた頭の天辺^さ上げて、しよぼしよぼと帰^{って}きた。

ほしたら向^{こう}から白髪^の老人^を先頭^{にした}馬^さのつてきた一行^がいだった。

「これこれ、若い者。ちよつと顔見^せろ。それは売^りもんだが」

て聞いた。

「はい、売りもんだ。んだげんど、高くて、とても大衆向きでないもんだ。どなたも買える値段でないもんだから、一端家さ帰っと思つて織つて呉^けだ人の希望もあるもんだし、そのつもりで戻つてきたんだ」

「そうか、いかほどだ」

「金、三千貫でございます」

「うん、何。金、三千貫さあ、安いもんだ。余が買つてつかわす。余の元へ来たれよ」

ていうわけで、そうしたれば、ほだえしてるうち、道がぐるぐる、ぐるぐる廻るような気がして、あたりの景色がどんどん、どんどんうしろさ行くようになったけあ、すばらしいお屋敷が見えてきた。何だか雲間に漂うようなすばらしいお屋敷が見えてきて、ほして、「ここだ」て、ほこさ行つたれば、ちゃんとお膳立てができていて、

「そんではお前の、この布頂戴すつから、金三千貫はここさ用意して、お前に見

でもらって、屈強のうちの若衆さ、家まで届けさせっから、お前はここで、一献差上げっから、正直で親思いのお前に差上げっから、ここで飲んで行つてける」
というわけだ。ほして遠慮しながら御馳走になった。ところがほの老人曰く、
「この酒一滴、一口飲めば千年生きる。これ、お前さ三口飲むほど、おかあさんさ三口飲むほどお上げする」

「いや、実は家にはもう一人おります」

「いや、それは関係ない、ええから持つて行きなさい」

というわけで、そいつ貰つてかえんべと思つたれば、やっぱり道がぐるぐる廻るような気がして、はっと気付いたれば、自分の家の前さ放り出されたような格好でいだっけど。ほして何だかギンギンと音すんな何だと思つたれば、ほの金三千貫がきしむ音だけって。

ほうしたれば、にこにこしながら、蛤姫が待っていだっけて。そして言うには、
「売れなくて困つたつたべ」

「うん」

「ほうしたれば、白髪の老人が来たんねけがよ」

「来ったった。なしてお前知ってる」

「いや、何を隠そう、わたしはお観音さまのお使いだ。天から、あなたがあんまりかいがいくお母さんばめんどろ見るもんだから、何とかお手伝いして来^やい^や言^やつで、天から参ったお観音さまのお使いだ。ほんで、海荒れたと言^やつて来た女も、やつぱり使^やいだし、白髪の老人も、力持った若衆も、全部天からのお使^やいだ」
て、ほしてそこで金三千貫と不老の酒もらつて、ほして、

「んでは、わたしの任務も終わったから、これでおさらばでございます」

て言うて、その人が天さ、すうつと登つて行つてしまつたど。どんびんからりん、すっからりん。

7 芋 太 郎

316

むかしむかし、じんちやとばんちや、子どもいなくて、子ども欲しい、子ども欲しいって願っていた。

ある時、ばんちやが川さ洗濯に行った。じんちやが山さ柴刈りに行った。ほしたれば、川上からドンブリコ、ドンブリコと大きい芋が流ってきた。

「いやいや、すばらしい大きい芋だ」

というわけで、はいつ、いきなり、ばんちや拾ってきて、家さきて、ほしてお釜でふかして、じんちやど二人して食うべと思ったげんど、ほのふかした匂いがブーンと来て、何ともばんちや我慢さんねくてはあ、自分一人して食ってしまつたはあ。

ほうしたれば、腹張って腹張って、ほれ、うしろの山の方めがけて、ポーンと屁たっだれば、じんつあ、柴刈らねで、草刈った（臭かった）ど。どんぴんからりん、すっからりん。

8 舐めくらべ

317

26

むかしむかし、若衆だ、藁仕事小屋さ集まって、賭けていうなすんなだけど。
ほして、いろいろな賭けあつたげんど、

「んだら、おれ、一時間に砂糖二十五貫目舐めてみせる」
という人いだっけど。

「ほだえ舐められるもんであんまい」

「いや、舐める。ほのかわり、おれの言う通りしてもら wanna ね」

「いや、二十五貫目なの舐めっこんだら、何たことでもすつかり舐めてみろ」
なえ

「んでは、酒一升賭けて…」

「酒一升なて、いまといっぱい出してもええつだな。ほだな。二十五貫目も舐め
んのだったら…」

「いやいや、無理すんな」

ほして、樽からドンコイショ、ドンコイショと金槌かなてこで掘って、ほして、はいっ

ば直径五寸ぐらいに、みな団子に丸べてもらった。ほして何故すつと思つたら、「ああ、まだ三十分ある。まだゆっくりええこら、いま二十分ある。どうれ、もう十分だから舐めっか」

て言うたけあ、片っ端から舐めた。残りなく、つるつと舐めたど。舐めること舐めたげんど食うでなかつたそうだ。舐めた人に酒一升とらっただけど。

ほれから、一升て名のついたものは、何でも食うていう人いだったて。人の食うものであればな。ほしたれば、

「塩一升食いが」

「ほだな簡単だ」

ほして、やつぱり塩一升出さった。ほうしたれば、最初ペタラペタラて舐めっだけあ、中ほど、べろべろ、べろべろて舐めでつて、塩一升つるつと舐めた。

「ほんでは御馳走さま。んでは、賭けた酒五升もらったぞ」

て行ってしまった。

「いや、医者でも呼ばつてはあ、親類衆でも集めっだ、んねがはあ」

ていたら、次の日、何てもない。額のあたりさ、つうと（少し）汗かいたような跡ある。なぜすんなだと思つて見たれば、熱いお湯立てて、ほして、はいっちら入っど、塩はみな汗になつて吹き出すのだけど。

ところがはいつ憶えらつで、井風呂せいふうろのドウ抜がつだ。ほうしたれば、七転八倒の苦しみて、お湯湧くまで死ぬか生きつかていう苦しみたつたど。それからほの人、賭けしねがつたどはあ。どんぴんからりん、すっからりん。

9 ねずみと和尚

318

あるところに、とってもねずみば可愛がつている和尚さまいだんだけど。ほしてほこらさ招ばつたり、何かえしても、半分以上ねずみさ御馳走して、ほしてねずみば大切にしているんだけど。

ある晩のこと、大分寒くなつたから、栗でも焙つて食うべと思つて、ほして檀

家から貰ってきた栗、囲炉裏さ焙り始めた。丁度そのころ世相が悪くなつて、大分泥棒だの強盗だの流行はやっていた。ほして村人たちもそれにほとほと手を焼いていた。

ところがその晩に、泥棒二人が和尚さんの家ねらつていだ。ほだなこと全然知しやね和尚さま、まず栗焙つて、

「今夜もこりや、そろそろ友だちだ出はて来るでないべか」

と思つていた矢先に、そろりそろりと来たわいなて、ねずみが出てきた。ほだえしているうちに、泥棒だ、ほれ、和尚さんのお寺さ来て、節孔から覗いっただ。ほうしたれば、和尚さま、

おんちよろちよろの孔のぞき

またもや仲間が現われ候

ほれほれ、ほりや手掛けた

こういう風に言うたれば、ほの泥棒二人がきて孔のぞきしつた。ほして別な来たれば、また、「仲間が現われ候」て言わつてびっくりした。ほして箆笥さ手かけ

て盗っど思つたれば、「それぞれ、手をかけた」て言^やつた。はいつあ、お寺の和尚さんの方では、ねずみが栗さ手かけたこと言つた。ところが泥棒がダンスさ手かけたな、その通り言^やつて、

「いやいや、こりや大した和尚だ、うしろ向いで暗いどこみなわかんのだ。こだな和尚な盗んだんでは、なぜされつか分んね」

て、ほとほと手焼いではあ、一目散に逃げて行つた。

ほの話、村中さ聞えで、ほして村では、

「ほんでは和尚さま、泥棒よけのお経も知つてだんだ。ありがたい和尚だ」
て、ほして、

「泥棒よけのお経、おらえの家さも上げてけらっしゃい。おらえの家さも上げてけらっしゃい」

ていうわけで、ねずみ可愛がつたおかげで、和尚さま大變お金持になつたけど。
どんぴんからりん、すっからりん。

10 吠

狐

319

むかしむかし、じんつあとはんちや暮してだんだけど。ほのじんつあていうな、若い時、山さ行つて片一方の目、木の端で突つついて、目つかち盲目になつたんだけど。んだげんど性格が明るくて、とつても歌は上手、踊りは上手、氣持がええもんだから、ほつつこつつき頼まれる。ほら、御祝儀があつた。年祝いあつたというど、

「来てけらっしゃい、来てけらっしゃい」

て頼まれる。ほしてほどほどに酒も好きだつた。

で、ある時、遠くの町の旦那衆さ頼まつで、やっぱり踊りおどったり、歌うたつたり、座持つてけろていうわけで、頼まつで行つた。ところがそのじんつあにも一つの癖あつて、少し酒飲みすぎる嫌いがあつた。飲みすぎつど、どここなく、ばったり倒つで、ほこさ眠つてしまふがつた。

で、冬なんか寒くて凍え死したりすつど悪いと思つて、ばんちやが時どき迎え

に行んかった。

ある日もやつぱり、ばんちやが、帰りが遅いので行つた。ほしたら向うから酒酔っぱらつた格好で、ふらりふらりとやつてきた。

「はあ、じんつあ、じんつあ、今帰つてきたか」

「はい、今もどつてきた」

ほして家さ入つてみたれば、何だか様子がちがうほによつく見たれば、家のじんつあ、右の目悪れな、そのじんつあ、左の目悪れがつた。

「はあ、これはひよつとしたら、原っぱの狐だかも知んね」

て言うな、ばんちや、ピーンと頭さ来たもんだから、

「じんつあ、じんつあ、今日は寒くないようだか」

て聞いた。

「いつもだど、ああ寒い寒い、何だか狐抜けるようだ、酒抜けるようだて、俵さ入っからよ」

「ああ、忘せっただけ。ばんちや早く俵出して呉ろ」

て、じんつあ言うた。ばんちゃ、にんまり笑いながら、俵出した。ほしたれば俵さ入った。

「ほして、結って呉ろ、結って呉ろて言うがった」

「ああ、ほだほだ。結って呉ろ、結って呉ろ」

俵さ入って、いきなり結ってもらった。

「ほして、俵さ入って結ってもらうど、梁さ下げて呉ろ、早く梁さ下げて呉ろて言うて、囲炉裏端の上さ、下げてもらうなだった」

「ほだほだ、はいつだ。おれば早く下げて呉ろ、まず」

て、さげてもらった。ところが、ばんちゃ、下から杉葉や何かで一生懸命いぶしたので、何とも仕様なくてはあ、狐コ、すばらしい尻尾出してしまったはあ。

ほうすつどばんちゃ、表さ出はって、

「おお、みんな集まって呉ろ、原っぱの狐押さえだ」

て、怒鳴った。ほこ、ひよこひよこ、じんつあ帰ってきた。

「ばんちゃ、なんで狐せめた」なて。

「実は、じんつあ、こういうわけで、じんつあえ化げで来たげんども、動物の浅ましきで右の目と左の目、間違つて化けてきたのよ。はいつ、おれ氣付いっただけ」

て言うて、原っぱの狐取り押えだんだけど。どんぴんからりん、すつからりん。

11 櫟の和尚

320

むかしむかし、ある村にお寺さまあつて、そのお寺さまにすばらしい、雲抜くような櫟の木あつた。

ところが、その和尚さまはすばらしい位持った和尚さまだつた。了角和尚、了角僧上て、了角て名付った人で、「僧上」ていう位持つてだ。ところが誰も、「僧上さま、僧上さま」ていう者が一人もいなくつて、「櫟の和尚、櫟の和尚」て言うがった。すばらしい櫟、三里四方から見えるような大きな櫟なもんだから、み

んな通称「櫟の和尚」て言うた。僧上さまて一人も言ねな不服で、不服でなんねえがった。

「ははあ、野郎べら、この櫟の木あつから、僧上さまて言ねなだ。よし、この櫟の木切つてしまえ」

て言うわけで、庭師、木挽きたのんで伐りかかった。ところが庭師も木挽きも、「いやあ、和尚さま、この櫟だけ切んねようにして呉ろ、まず部落のシンボルみたいなもんだ」

「ほだごど言うたて分らね、切つて呉ろ、切つて呉ろ」

て頼まつで、切ることにした。ほして切つたれば、こんど「僧上さま」て言うがと思つたれば、切つたれば、こんど、「切株和尚、切株和尚」て、みんな言う。「はあ、切株和尚ではうまくない、この切株、すぱつと取つてしまわなくてはな
んね」

て、切株、こんど全部掘り起こして取つてしまった。したれば大きい穴出てしまった。こんど、ほりや「穴の和尚」なて言れつどなんねていうわけで、こんど

一生懸命村人足を頼んで、ほの穴埋めはじめだ。きれいに埋めたから、こんど「僧上さま」て言うがと思つたれば、やつぱり最後に、「穴埋め和尚、穴埋め和尚」て言うて、「僧上さま」て言うな一人もいねくて、一生終るまで「穴埋め和尚」だったど。どんぴんからりん、すつからりん。

12 みかんの芽

321

むかしとんとんあつたけずま。

あるとき、宿場町さ殿さま泊つて、みかんの皮投げて行つたんだど。今みかん
なていうどみんなの食いものだげんど、当時は殿さまぐらしいか食^かんねがった。

ほんでみんな、村中の人がみかんの皮の匂いかがせてもらつたなていう時代に、
ある人がみかん、たらふく食つた。ほうして、あんまりうまいもんだから、種子
一緒に飲込んでしまった。ところが、

「はあ、こりや、種子飲んでしまった。出るであんまいし、こりや」

て思っているうちに何だか腹少し片腹固くなったと思ったら、ほっから伸びて来るような気がして、ほして喉ずうっと伝わって、頭のとっぺんから芽が出た。

「あらら、芽出てしまった、こりや」

ほだえしているうち、はいつあドンドン伸びて行って、はいつは白い花咲いで青い実つけてしまった。

「あら、実なのだっただ、こりや」

なっているうちはあ、たちまち今度は、はいつは黄色いみかんになって、子どもら、わいわい来て、みかん挽ぎ始まった。うるさいくて、うるさいくて仕様ないから、鋸で切ってしまうべと思って、鋸あててみたげんど、自分の頭の上なもんだから、鋸、思うように挽かんね。何とかしていうわけで、本気なて引張ったれば、スポーンと抜けでってしまった。

「ああ、ええがった」

と思ったら、頭さ大きい穴あいてしまった。ほしてある時、外さ行ったら、

雷さま雨だ。雷さま雨はこんどそこさ溜つてしまつて、湖できてしまった。

「やあ、こりや困つたごんだ。湖なつたつた、こりや」

なているうちに、こんど子どもらいっぱい、わさわさと集まつて雑魚釣り。

「いや、フナ釣らつた、鯉釣らつた」

て、ほら、耳あたりさ引っかける、眉あたりさ引っかける、何だ^{なん}かんだない。

うるさくて仕様ない。

「なんだべ、この野郎べら、ほに、うるさいごど、うーん」

なて言うたれば、

「何言うていんなだ」

なて、揺り動かさつて、はいつあ夢だつたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

むかしむかし、この百姓の状態を見廻りに来る役人がいだったど。

ほんで、その役人のうちにも、性のええ立派な役人と、性悪^{たうわ}れくて百姓いじめたり、いじったりするのがいて、非常に困ったった。んだから百姓だ、役人の見廻りていうど、皆ガン首そろえてぺこぺこして、ほしてうまいもの御馳走して、なるべく年貢少なく上がるように願ひ込めて扱ったもんだ。

ある村さ、何時の何日^{いつか}、役人が来つからて言う知らせがあつて、

「はあ、何御馳走したらええがんば、まず、御飯^{おま}なの、どこにもあるっだ、この手打ちソバにでもすんべ、そばがきええが、手打ちソバええか」

て、みなで相談したらば、「ソバええべな」ていうわけで、「んだれば、タレ何故作る」「タレはこ^うこ^う、こ^うこ^ういう風にして作つたらええべな」

「はあ、はえつはええがんば」

ていうわけで、ソバでお招びすることにした。ほうしたれば、そこさ役人が来

て、ずうっと田畑見廻して、ほしていよいよ昼間の御馳走になった。ところがソバ出て、

「タレ、よし。ソバよし」

まず、うまく食ったげんど、薬味がなかった。

「これこれ、薬味がないぞ」

ところが、薬味というの、誰も知しやね。

「ほんでは和尚さまさでも行つて聞いてみつか」
て、聞いてみた。ほんでもわからね。

「これは困つた、その薬味というな、どういふもんだか、聞いてみるに越したことはない。聞くはいつときの恥ていふもんだから……」て、

「お役人さま、お役人さま、薬味というのは、何ば言ふもんだ」

「ああ、それはネギだ」

「ははあ、ネギつて言えば、法印さまだ」

というわけで、法印さま招ばりに行つた。ところがほだえしているうちにはあ、

食事終ってしまったはあ。

「昼間の食事終ったから、ネギはすぐ生き付くから、埋めておけ」
て言うた。

「はあ、法印さまば生き埋めにしろて言うのだが、来方遅い^{きかた}がら、ごしやえで、生き埋めにしのであんまいし」

て、法印さまさそのわけ語ったれば、法印さま、

「何だ、人ば生き埋めにしろなて、ほだなことないわけだ。とんでもない話だ、おれ行ってみる」

ていうわけで行った。ほうしたらその役人が言うには、畑のネギで、法印さまは「禰宜^{ねぎ}」ちがいだったど。ほうしてほの話、やつと村人はわかった。

「ほんではよかった」

て言うたば、

「ほんでは、下がってよろしい」

て、役人が言うた。下がってよろしいて言っただげんど、何さ下がつかわかんね。

ぐるつと座敷見廻したらば、長押あった。ほしてほこと行つてだ四、五人が長押さぶら下がったつたど。どんぴんからりん、すっからりん。

14 和尚と狸

323

むかしむかし、貧乏なお寺あったんだど。そこさ毎晩のように狸遊びに来る。ほの狸もよる年波で、田畑さ行つて、ねずみ食つたり、あるいは蛙せめて食つたりするほど、元氣なくなつてはあ、和尚さんどこさ御厄介になつていだんだけど。和尚さまも寒いとき火さ当らせ、あるいは自分が法事さ招ばつたり何かえしたとき、いろいろ貰つて来て、その狸さ食せで養つていだ。そういうことが一年、二年、三年続いた。狸は、

「和尚さま、和尚さま、おれ、こだえ御厄介になつて、恩返しすっだいげんど、何ええがんべ」

和尚は、

「いやいや、恩返しなんていらね。こうして仲よくしてるだけで、ええなだ」

て。ほだえしていねうちに狸はぽいといなくなつた。なんぼ待つてでも、

「何したべ、あの狸、なんぼ待つてでも来ねつた。どこかで抑えられるか何かしたであんまいし、こりや」

て、心配した。ほうしたれば、七年目にひよっこり現わつた。

「和尚さま、和尚さま」

て、大変喜んだような顔して来たけあ、「何だ」というたら、

「和尚さま来て見たれば、銭ないようだから、金持つてきた。七年もかかった」と言うたらば、

「おれは、人を騙して取つたり何かえすんのは造作ねげんど、和尚さま、どつから貰つてくる金もみな浄財だ、きれいなお金ばりだ。ほいつ、盗人してきた金では、和尚さまもつたいたいと思つて、舟さもぐり込んで、佐渡さ渡つた。ほして佐渡の金掘りしつたとこの古ワラジさくぐり込んだ砂金、かいつ、つうとずつ

集めて、七年かかって、やっとこれだけ持ってきた」

て、和尚さまの前さ出して、

「おれも力つきて、これまでだから、和尚さん、おさらばでございます」

て言うて、すーいと狸の姿なくなつて、錢だけそこ置いて、和尚さまさ長年のお礼して、狸はどきどもなく行つてしまったけど。どんぴんからりん、すっからりん。

15 三枚のお札

324

むかしとんとんあつたずま。

あるところに、和尚と小僧といだった。ほして小僧つこはある秋も深まつてきた頃、

「和尚さん、和尚さん、おれば栗拾いやってけらっしゃい」

「ならん」

「何とか栗拾いたいから、一つ、どうか、和尚さん、栗拾いやつてけらっしゃい」
「ならん」

何べんも「ならん、ならん」て言つても、小僧が言うもんだから、

「ほんでは仕方ない。行つて来い。しかし山には何た妖怪変化がいっかわかんね。
三枚のお札をお前さやつから」

て、三枚のお札貰つて、ほして山さ行つた。ほうして行つたれば、栗は落つて、あっち拾い、こっち拾い、ほっち拾い、こっち拾いしてるうち、とつぷり陽暮れてしまった。たまに行つたんだから、うれしく一生懸命和尚さんさいっぱい栗拾つてつてと考えているうちに、

「こりや、日暮れてしまった、こりや困つたこと始まつたもんだ」

真暗で、まず鼻つままつてもわかんねほど暗い晩であつた。ほだえしているうち向うの方にポカッと赤い灯が見える。

「あそこさ行つて、一晚の宿、厄介なつか」

と思つて戸を叩いた。ほしたればんちや居つけ、

「ばんちや、ばんちや、今晚一晚泊めてけらっしゃい」

「泊れ」

見たれば、普通のばんちやと違つて、何だか様子変だと思つていたら、ほいつあ
鬼婆だつた。ほして、はいっぱいきなり戸棚さ入つて、包丁砥ぎ始めた。

「こりや、殺さつては大変だ」

と思つて、

「ばんちや、ばんちや、小便出る」

て言うた。

「小便なの、ほさ、たれろ」

「ばんちや、ばんちや、ばっこ出る」

「ばっこでは仕様ない」

て言うんで、綱つけて便所さやった。ほうすつど、ほの小僧っこは、賢こいも
んだから、便所の柱さ綱しばりつけて逃げた。ばばは一生懸命、「まだだか、まだ

だか」て言うたら、「まだだ」ていう。あんまり長いから、しびれ切らして鬼婆行つてみたれば、逃げた。

「あの野郎、逃げたな」

て言うど、追っかけてきた。ほして、どんどん、どんどん逃げだげんど、いまつうとで押えられるようだ。

「ああ、和尚さまにお札もらつて来たっけな」

て言うわけで、「砂山出ろ」て、お札まいだれば、砂山出た。登つどズズズ：くずれる。また登る。ズズズ：。ほんでも鬼婆、食^くだい一心で、ほこのりこえてきた。ほしてまた、どんどん、どんどん追つてくる。小僧逃げた。ほしてまた「川出ろ」て、お札まいだ。したればすばらしい川出た。鬼婆、じゃぶじゃぶと入つては流され、入つては流されしたげんど、鬼婆もじゃぶじゃぶ漕いで、ほしてまた小僧が捕まりそうになつて、ほして最後のお札の「火出ろ」て、まいだ。したれば、ぼんぼん、ぼんぼんと火燃えた。何とも仕様なくて、「あつつ、あつつ」なて言うたげんど、ほの火の山も越した。ほんどき丁度、ようやくお寺さ辿りつい

た。

「和尚さま、和尚さま、鬼婆だ、鬼婆だ。鬼婆に追わっだから助けてけらっしやい」

「おお、ほうか。んだから行ぐなつて言うたんだ。仕方ない。んだらこの木の箱さ入つてろ」

木の箱さすんと入った。ほうしたけあ、間もなく鬼婆追っかけて来て、

「我鬼コ来ねがつたが」

「来ね」て言うた。和尚は、

「お前は鬼婆だて言うけあ、どうだ大きくなれつか」

「なるい」

「大きくなつてみる」

和尚さん言うたれば、ものすごい雲つくような鬼婆になった。

「ほんでは、ちっちゃくなるいが」

「なるい」

「どこぐらいまでなるい」

だんだえ、だんだえ小^ちつちやくなつてしまつたところ、くるくるつと丸めて飲んでしまつたけどはあ、はいつば。ほうしたれば何だか和尚さま、腹、きりきり、きりきりて痛くなつた。ほして、

「小僧、腹揉め」

ていうわけで、小僧は木の箱から出はつて、和尚さまの腹もんだれば、尻^{けつ}から蠅になつて飛んで行つたんだのはあ。わんわん、わえーなて。それから世界国中の蠅がみんなほつから拡がつたんだはあ、なて、昔の人は言うたんだけど。どんぴんからりん、すつからりん。

16 笛吹き童子

325

むかしむかし、ある山奥に不思議な少年がいだんだけど。不思議な少年という

のは、何年かに一度、山から笛鳴らしながら降ってくる。ほうすつど、秋さかなの、取ってきた茸はみな追っかけて行く。山羊の子も羊もみな追っかける。ほしてええ者みなほの少年に追っかけてしまふ。恐つかない少年だつて恐れらつていた。何年に一度来つか分んね、不思議な笛鳴らして来るんだつて。

ところがある年、その少年が現わつた。ピーヒャララ、ヒャラヒャラと草笛のような鳴らして来つど、ねずみまで追っかける。ほしてやつぱり取つてきた茸みな、はいつちや追っかけた。

「あらら、不思議なこともあるもんだ」

て、みんな見つた。ほうしたら町で喧嘩はじまつた。ほの不思議な少年の声聞いだれば、喧嘩やめてしまった。うっとりしてしまった。ほして、百姓さ年貢取立てに來た。きびしい役人も、何だかにこにこ顔になつて、取立てしねぐなつた。不思議なこともあるもんだなあと思つて、ほしてずうつとほの行列見つたれば、茸もええ茸でなくて、腐れかかった茸をみな連れて行くのだけど。ほして世の中のいろいろの争いごととか、そういう風な搾りとりなていうの無くするため

に、ほの不思議な少年が山から現われんなだけど。

「んだらば、ほの茸は」

て言うたらば、茸は松茸であろうと、シメジであろうと、スス茸であろうと、ええ茸は連れて行かんねで、悪れ、腐れかかった茸だけ、そいつを食うど中毒するもんだから、それば連れて行くのであつて、ええ茸は連れて行がねがった。ほして人間に害するねずみとか、悪れものをつれて行くのだった。んだから不思議な少年というものは、村のためになる少年だったこと、始めてわかったんだだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

17 金持ちと托鉢僧

326

むかしむかし、あるところに、どっからともなく住みついたお坊さんが托鉢しながら、そこらの人さ説教したり何かにして布教してだお坊さんいだったど。

ほして貧乏なもんだから、毎朝夕、托鉢に廻った。んで、ほこの村で一番金持ちの、倉四つも五つも持つて、ほこさ、ぎっしり米積んでいる人が、さっぱり何もめぐんだことなかった。

ほしてある時に、ほこさ行つてお坊さんがお願いした。

「何とか一つ、おねがいします」て。

「いや、おら家では、乞食坊主さなの呉^ける米や、何かい、何もない」

て言うて、はねつけだったど。ほうしているうちに、そのお坊さんが行かなくても一人して、托鉢が村中廻る。

「不思議なもんだ」

ていうわけで、村の人みんなそれさ寄謝した。少しずつ御飯、お菜、漬物、いろいろしたげんど、ほこの家ではさっぱりすねがった。ところがある月夜の晩に、米倉がばだばだ、ばだばだそうぞうしい。何だと思つたれば、戸はずつで、錠前掛けった戸はずつて、中から米がどんどん、どんどん飛んで行く。一俵、二俵、三俵……百俵の上も飛んで行く。その先見たれば、托鉢の鉢めがけてみな飛んで行

ぐ。ほしてほの家の旦那さま、

「いやあ、待つてでけらっしゃい、待つてでけらっしゃい。こんどから決してこういうことしねから、待つてでけらっしゃい」

て言うたば、その鉢が待つてだつけて。ほして、

「いや、おれ悪れがった」

て、それから、

「托鉢来た和尚さんさも必ず、つうとずつ、お上げしますから、何とかほの米だけ持つて行かねでけらっしゃい」

て、お願いしたつたて。んだから、あんまり欲ふかくさんねもんだつて言うたけど。どんぴんからりん、すつからりん。

18 さいわいの化けもの

327

54

むかしとんとんあつたずま。

ある村に、一軒の古びれた家があつて、ほこさ誰も住まんねんだけど。夜中になつど、化けものが出る。ほして、コヤコヤ、コヤコヤて化けものだ語つては居ねぐなり、語つては居ねぐなつたりする。そういう一軒家があるんだけど。

ところが、ある時、一人の侍が訊ねてきて、

「ここらさ、どこか泊つどこないべか」

て聞いた。ある人が、

「ほの空家あつけんども、化けもの出る」ていうたけあ、

「いや、おれあ、化物出だつて苦なねえから、そこさ厄介ならんねべか」

て、ほこさ泊つた。ほうしたれば、夜中えなつたれば、やつぱり黄色い袴着つ

た化けもの出てきて、

「ほりや、さいわいだ、ほりや、さいわいだ」

ていう。ほだえしたら、今度あ白い袴着ったな化けもの出はつてきて、やっぱり「さいわいだ、さいわいだ」て言うた。ほの侍が、

「もしもし、ちよつとおたずねしますけど、あなた方、何者だ、おれは今晚ここさ御厄介になつたげんども、なして何かの怨みでもあるんだか」

て聞いてれば、

「いや、おらだ、ほでない。ここさ生まつた錢の精だ」て。

「ほんでは、あなた方だ、こうして出はんが、世の中さ出つだくて、每晚出はんんだか」

「んだ、どうかおらだば掘り起して、シャバさ出してけらつしやい」
て。ほだえしているうち、ほのぼの夜明けた。村人は、

「化けものに食^かつていねはあ」

と思つて来てみれば侍はちゃんといだつて。そして村人さ、

「実はゆんべな、やつぱり化けもの出だけ。んだげんども決して悪れ化けものでなくて、袴着った。こういう風な黄色の袴、白い袴、黒い袴の人が出て、へさいわ

いだ、さいわいだ」ていう。どうか村人みんなして掘ってけらっしゃい」

て。ほして次の日、村人足出て掘ってみたれば、黄色い袴着ったと思ったなは大判、白い袴は小判、黒い袴は一文銭。ほうしていっぱいの銭出てきて、その旅の侍は、

「こいつ、村中して分けてけらっしゃいて、娑婆さ出っだくて娑婆さ出っだくて、何とも仕様がなくて、止むにやまれず化けものなつて出はったもんだから、お前だに使ってもらうど、何よりもへさいわいだ、さいわいだ」て、夜出はつてきつたんだから」

て言うて、

「ほだらば、お侍さん、あなたも何^{なん}ぼか取つてけらっしゃい」

「いや、おれは諸国修行する身で、銭はいらね」

て、かき消すようにいねぐなつてしまった。ほしてほの銭、村中みんな分けて裕福に暮して、ほこさこんど次の日から化けもの出ねがったとはあ。どんぴんからりん、すつからりん。

19 小判産す大黒さま

328

むかしむかし、あるところに、素焼きのお大黒さまあつた。ところが見たところ、悪いんだげんど、その素焼きのお大黒さま、どういふわけか毎日一枚の小判たれる、チャリ。次の日またチャリ。

はいつ、その噂聞いたものすごい欲ふかい旦那さま、はいつ高い銭出して買つて行つた。ほしたけあ、やつぱりチャリン、チャリン。小判一枚ずつたれる。一枚一枚たれんのめんどくさいから、尻の孔大きくすつどいっぱいたれるんではないかと思つて、焼け火箸で尻の孔大きくして呉^けだ。ほしたればほん時、お大黒さま悪れ顔したつけ、次の日から、ざらざら、ざらざらして、砂しかたれなくなつた。ほうしたれば、ほの旦那、ごしやえではあ、ぼっこしてしまつた。ほして、んだげんど、売つた人あ、心配して来てみた。

「なしてほだいで、ぼっこしたべ」
て言うたれば、

「こういうわけだ。一枚なてめんどうくさいから、尻さ焼け火箸当てて呉だ。したれば砂しかたんねぐなつたから、ぼっこした」

「ほんではなんねつだな。おれさ元の銭でゆずつてけらつしやいはあ」

て、ほしてほの人がまた持つてつて、ほの焼け火箸当てたとこば直して呉で、壁塗つて治して呉で、ちゃんとして呉だれば、やつぱり次の日からまたチャリン、チャリンで小判産すんだけど。馬鹿欲たけでしたつて駄目だ。結局あんまり馬鹿欲はたけらんねもんだつて、その人言うたもんだけど。どんぴんからりん、すつからりん。

20 効 き 鼻

329

むかしとんとんあつたんだと。

あるところに、とっても正直で働き者の若衆いだんだけど。で、ある日もタガ

ラ背負って、ほして畑さ行くべと思ったれば、何だか天狗の鼻みたいな落っでい
だっけ。

「こいつあ、おもしろいもんだな」

と思つて、その鼻、ちよいつと拾つて自分の鼻さちよえつとふつ付けで見たれ
ば、取んねぐなつた。

「こりや困つたことになつたもんだ」

と思つたれば、その鼻ふつつけだらば、ええ匂い、どつからともなくしてくる。
して、鼻ひくひくさせながら、ええ匂いのする方さ行つてみたれば、きれいな花
出っただけ。

「はあ、こだえきれいで、こだえ匂いのええ花なて珍らしいから、家さ持つて行つ
て植えておくべ」

て思つて、はいつ取つてタガラさ入つた。ほしてずうつと畑さ行くべと思つた
れば、白髪の老人が現われて、

「これこれ、若者」「はい」

「鼻、返せ」

「はい、花返せて、花だればタガラさ背負った花だべがっす」

「いやいや、ほでない。お前の鼻さふつつげった鼻返せ」

「はい、今、ふつつけだばりだから…」

て言うて、無理無理もいで返したど。ところがほの老人曰く、へお前は正直もんだ、お前の背中さ背負った花は、これは千人の病人を治す力をもった花だ。ほの匂いをかぐど、何た病氣でも、たちどころに治る。ええか、ゆめゆめ不沙汰にすんなよ」

て言うけあ、すうつといねぐなつた。

ほだえしているうち、ほの話拡がつて、殿さまのお姫さま、体悪れがった。して、ほこさ、ほの花持つて行つて、匂いかげせだれば、たちまちええぐなつた。

殿さま、

「お前、ほの花、おら家^えさ呉^けで行つてけるはあ」て言うた。

「いやいや、お言葉だげんども、千人の人を治さんなねなだ。んだから、これか

ら急いで帰って、村中、あるいは隣村、ほの隣村、体悪れ人、みな治して、千人治したら、また来ます」

て言うて行つた。

ほして、次の日から次々と病気を治してやつて、ほして千人全部治して、こんど病人いねぐなつてはあ、ほして殿さまのお姫さまとめでたく結婚して、簪どのおさまったけど。どんぴんからりん、すっからりん。

21 不思議な織物

330

むかしむかし、戦国時代に、どこの殿さまも年貢の取立てがきびしいがった。百姓町人が楽でなかった時代、ある若者が考えた。

「ただいて、百姓町人ば縛り上げて、ほしてすばらしい生活している。何かうまい方法ないか」

と考えれば、やっぱりええ考えあつた。はいつは何だか言うど、

「ウグイスの声ば縦糸にして、モズの声を横糸にして織る不思議な織物、こういう織物を持つて行つて、殿さま売ることだ」

と、こういうこと考えた。ほして、はいつ城中さもつて行つて、

「この織物、買つてけらしやい」

ところが、そこのお側付きの役人が、

「何だ、さつぱりないでないか、見えねでないか、どこさ持つて来たんだ」

「はあ、これは異なことおっしゃる。あなたさまは何職でございます」

「おれはお側付きだ」

「はあ、あなたはお側付きは適當でないと思われる。この織物見えね人は、御家老さまであらうと、殿さまであらうと、その職に適當でない人さは見えない、適任者には見えるものだ。何せ、縦糸がウグイスの声、横糸がモズの声で、不思議な織物だ。この織物さえ持つてれば、鬼に金棒、財産はふえる。ほらええぐらいには付けるという品物だ」

「一反なんぼだ」

「三十両にござります」

「んでは、只今から取り継ぎすつから」

て、家老職が出てきた。

「どれどれ、その織物見せろ」

「はい、これでございます」

「ほう、これは立派な織物だ。これか、ウグイスの縦糸にモズの横糸というな」

「はい、さようでございます」

「ほう、よく織り上がってる」

見えねて言^やんね、自分が家老職適当でないって言われつから、そして殿さまもっ

て行つた。殿さまもはいつ見っただけあ、

「うん、なるほど立派な織物だ、いかほどだ」

「三十両にござります」

「よし、三十両は安い」

ていうわけで、買ってよこした。ほしてその若者にまんまとやられたけど。ど
んぴんからりん、すっからりん。

22 雀のふくべん

むかしとんとんあったけずま。

ある時、ばんちやが表さ出はて見たれば、小雀がどこか怪我したみたいに、ピ
イピイ、ピイピイて苦しんでいた。拾い上げてみたら脇腹、何かに傷つけてい
たつて。ほんでばんちや、はいつ一生懸命、膏藥貼って呉^けだり、治して呉^けで、
して、餌^{もの}食せですっかり治してけだ。ほうして四、五日おもつたれば飛べるよう
になった。

「ほんでは、ここさ押えらつでいるより、自由に飛んで行け」
ていうわけで、ばんちやが飛ばしてやった。何べんも何べんも首さげるように

してとんで行ったげんども、二、三日おもったれば、三つのふくべん持ってきたつて。ほして裏の洗濯物の糸さ下げて行つて呉^けだ。ほうしたれば、そのふくべんがむつくりむつくりと大きくなつて、口から米こぼれはじめた。

「あら、おかしいこともあるもんだ」

と思つて、不思議なもんだと思つて、ほのばんちや、こぼれつから何とも仕様なくて、一つのふくべんから米あけてみたれば、どんどん、どんどん出る。また次の奴もむつくりむつくり米が出はつてきて、ほして、ほの三つのふくべんからとめどなく米出はる。はいつ見つだ隣のばんちや、うらやましくてうらやましくて仕様ない。ほして、

「隣のばんちやん、隣のばんちやん、なしてほだえ、ええふくべん貰つてきた」
て言うたらば、正直なもんだから、一部始終語つた。

「ほんでは、おれもしてみんなね」

ていうわけで、わざわざ雀ばおさえて、怪我させて、ほして治して呉^けで、とばしてやった。したれば、やつぱりふくべん三つ持つて来たど。

「ははあ、こんど、おれさも運がついた」

て、ほうして裏さ行つて、ほのふくべんあけて見つど思つたら、中から出てきたものは、蛇とかムカデ、ゲジゲジ、トカゲ、ほうしてはいっせいに生きて、ばんちやはぐるぐる巻きにしたど。んだからあんまり人真似ばりさんねもんだて、昔は言うたけど。どんびんからりん、すつからりん。

23 嫁と卒塔婆

332

むかしとんとんあつたけど。

ある時、すばらしい旦那衆で、ほして丁度そのとき、娘のムカサリだつたど。

「はあ、ムカサリおー、ムカサリおー」

ていうわけで、タンスは行く、ほら仲人に手ひかえらつて、ムカサリ（嫁）行く。したればそんな時、急に空が變つたと思つたれば、薄暗くなつて、黒いトバリ

がすうつと降りて来たと思つて、はつと氣付いてみたれば、ムカサリはさらわれでいねんだとはあ。

「はあ、困つた、どさ行つたべ」

なんぼ探してもいね。

「ほんでは何とも仕様ない」

というわけでしたげんども、おかあちゃんだけは何ともあきらめらんねくて、

「んだらば、おれ、探しに行く」

て、次の日探しに行つた。野越え山越え探しに行つた。ほうしたれば暗くなつ

て何とも仕様ないから、そこらさまよつて歩つたら、一軒の庵寺があつた。んで

ほの庵寺さ、

「今晚は、何とか一晚泊めてけらっしゃい」

て言うたれば、そこさ尼さま居で、「泊らっしゃい」というわけで、大変厄介になつて泊つた。ほして次の朝げになつてみたれば、庵寺がなくて一枚の卒塔婆ば枕にして眠っただけ。

「ありや、おかしなこともあるもんだ。一枚の卒塔婆だった、こりや」

と思つて、んだげんど何だか夢うつつに昨晩ゆんべな見せらつだみたいなどこ、ほの記憶辿つてみつど、鬼が島ある。ほの鬼が島さお前の娘が連せて行がつだんだ。ほしてほの鬼が島には唐獅子が番をしている。夜は、こりや絶対駄目だ、昼間うとうと十二時頃、昼頃すつから、ほんどき行げつて言つたような氣したど。ほして、ほの尼さま、どこともなく消えでつて、おれが目覺めてみたれば、何だか卒塔婆枕にして眠つたんだ。

「不思議なこともあるもんだ」

ほだえしているうち嘘であろうと何であろうと、自分の娘探がさんなねなだから、教えらつだ通り、ほの時間待つてで、十二時頃行つてみたれば、やつぱりスヤスヤ眠つていだつけ。ほしてその唐獅子眠つてだどこすうつと通り抜けて行つたれば、カラトン、カラトンで、この機織りしつた。

「あの織り音はちょうど自分の娘の織り音だ」と思つて行つてみたれば、やつぱり娘だつて。

「あらら、お母さん来てけだが、いま間もなく鬼来つから、石の唐戸さ入っていらっしやい」

ていうわけで、石の唐戸さ入って、ビシンと蓋しつた。間もなく鬼帰つて来た。ほうしたけあ、ほの鬼は家の前の桜の木見っただけあ、

「あつ、桜二輪咲いだ。いま一人、人来たな」

娘さ聞いだ。娘は、

「いやいや、ほでないのよ、あの、実はきつと、あなたの子どもば、おれの腹さ宿たんだかも知んね。んだから二輪咲いたんだべか」

「ほんではめでたい」

ていうわけで、鬼だ酒盛り始まつた。

「子ども生れるなて、めでたいごんだ」

て、ジャガスカスカ酒盛りの用意して酒盛りはだった（始まつた）。ほしてある程度酔つて来たら、

「ああ、おれも今日は酔うたから、今夜は寝る。おれは木の唐戸さ入って寝つか

ら」

て、ほして七枚の蓋あけて中き入って行つて、七枚の蓋かけて、七つの錠かけて寝た。ところが、逃げん今だと思つたれば、やっぱりさっきの尼さま現わつて、ほして、

「材料小屋さ行つて、んだらば万里の車で逃げつか、千里の車で逃げつか、一走り一万里、一走り一千里という車ある」

したれば、

「いやいや、よしなさい。そんな車で逃げつことない。舟で逃げなさい」
て教えだ。

「ほんでは」

というわけで、二人あ舟さとびのつて、一生懸命、わっしょ、わっしょと漕いだ。ところがある程度寝つだけあ、鬼あぐらりと起きて、ばらばらと木の唐戸から全部蓋を押しかけて、出てきて、

「よしよし、よくも逃げたな、鬼どもみな舟さのつて逃げたとこの水飲んでしま

え」

というわけで、片端から、ズハズハ鬼どもが皆飲んだれば、今までずうっとこっちの方まで漕いできた勘定が、矢のように吸い込まった。どんどん、どんどん鬼の方さ行つた。したれば、さっきの尼さまが、

「鬼は、一番おかしいのが、ヘソ見とおかしくてなんねくなるんだ、人間のヘソ見つど、とてもとても笑わねでいらんねくなつから、早くヘソを出しなさい」
ていうもんだから、二人してヘソを出したれば、見っだけあ、一人の鬼は、アハハ……て笑つたれば、他の鬼もみな吹き出して笑つたけあ、飲んでだ水、みな吐いてしまった。ほの勢いで、こっちの方まで着いてしまった。難なく無事にこっちを着いた。

「娘もおれも命助けらつた。あの尼さま、んだら、どこへ御座つたべ」

と思つたら、尼さま、向こう岸に待っていだっけどはあ、ほして、

「尼さま、おかげで助けらつて」

て言うたらば、

「おれは尼さまでも何でも無い。野中のたった一枚の卒塔婆だった」んだげんども、毎年新しい卒塔婆に変えてけること約束したれば、その尼さま、すうっと居ねぐなっただけ。どんぴんからりん、すっからりん。

24 猿の尻はなぜ赤い

333

むかしとんとんあつたずま。

ある村に、東の家と西の家のあるところあつたんだ。

ところが東の家さあ、すばらしい旦那衆で豪家で、ほして物持ちだ。ほして西の家は貧乏でその日暮し、やっと暮していんなねがった。ところが西の家には子どももいね。年寄ってしまったはあ。東の家には家族はいっぱいいる。使用人はいる。ほこさ一人のみすぼらしい旅のお坊さん来て、

「何か一つめぐんで下さい」

て言うたれば、東の家では、

「お前のようなき呉んな、おらえの家には何にもない」

て言うて、一言のもとにはねつけてしまった。西の家では貧乏してでも、情深い家なもんだったから、

「ほんでは、おら家には米なて立派なものないげんど、そばがきぐらいならば、進んぜんべ」

ていうて、ほこで旅のお坊さんさカイモチ練つて御馳走した。ほうしたれば夜になつたれば、ほのお坊さん、

「お宅さ、こだえお世話になつたお礼すっだいげんど、何ええ、錢ええか、まず何ええ」

「いや、おら家では錢なて、ほだえ望まねげんども、二人はこだえして一生懸命稼いできたれば、年取つてしまつて、毎日疲こわくてなんねえから、若くなることできねえべか」

て言うた。

「それは造作ない」て言うたけあ、何だか旅のお坊さんが荷物の袋から黄色い粉出した。ほして、

「かいつで、お湯立てで入れ、二人一緒入れ」

て言うたど。二人はその中さ一緒に入つたれば、何だか、じんつあの腰のびるような氣してきた。ほして口の周りもそがゆいと思つたれば、髭あみなポロポロ落つでしまつて、ほうして今度、シワもなくなつて、つるつとなつたし、ばんちやの腰も伸びてきた。

「あらら、ありがたいもんだ」

二人はどうとう若くなつた。ほして、旅のお坊さん言うには、

「東の家さ行つて、火種もらつて来い」

「はい」

て言うて、次の日、

「こういうわけで、どうか火種切らしたから、火種呉^けでけらっしゃい」

「なんだ、お前どこの者だ」

「いや、おれは西の家の者だ」

「西の家の親父だら、いまつと年取ったべ」

「実はこういうわけで、旅のお坊さんに、疲こわえてなんねえったれば、ほんでは若返りの薬呉くつからてつていうわけで、こだえ若くしてもらった」

「ばんちゃんもが」

「ばんちゃんなの、おれより若いようだ」

「はあ、ほんではほの薬、おら家さも呉くろ」

「んだら、お坊さんに聞いて見て」

て、家さもどつてきた。したればそのお坊さまが、

「よしよし、この薬もつて行つて入けらせらっしゃい」

て、ほの薬もつて行つて呉くだ。ほうして一等最初、旦那と奥さんが入いった。ほうして上がつて、ほの後さみんな入いった。みんな一緒に入いらないどわかんねて言やつて、みんな一緒に入いった。ほうしたれば旦那さんと奥さん、猿になつて、他の奴は羊になつたり、兎になつたり、牛になつたり、みな動物になつてしまつたはあ。

「こりや困ったこと始まった」

と思つて、何とも仕様ない。魔法が効いて動きがとんね。はいつごしやえで、ほの猿になった旦那と奥さんが、夜な夜なかりに来る。西の家のじんつあとなんちゃ、若くなつたなさ、

「こういうわけで、かかりに来るず」

て言うたら、旅のお坊さま言つたれば、

「ほうか、んだらば、真黒い石、裏さ二つ焼いで置け、焼いて並べておけ」

ほして、黒い石は囲炉裏で焼いで並べつたれば、東の旦那と奥さんがきて、はいつちや尻かけた。「あちちち…」て言うて、尻、焼けばたした。ほれから猿の尻ざあ、赤くなつたなど。どんぴんからりん、すつからりん。

25 因幡の白兔

334

むかしむかし、因幡の国さ兔いだっけど。ほうしてほの兔が何とかして、向うの岸さ海渡って行ってみたい。んだげんども泳ぐには泳が^なんね。何んた恐つかないもので殺されつか分んねがらって、恐ろしいも恐ろしい。何とか向うさ行く工夫ないべかと思つて考えた。ほしたれば、ええこと考え浮かんだ。ワニザメば並べて、ほの背の上を行ぐとええて。「んだら」ていうわけで、ワニザメさ相談した。

「ワニザメ君、ワニザメ君、海のお前の数が多い^{うか}か、陸の兔の数あ^{うか}多いか、おれと競争すんべ。その方法として、お前だ海さ並んでみる。おれ一匹一匹勘定して行んから、ほして勘定し終わつたら、おら方で兔ばみな集めるから、お前勘定して、数多い方勝ちだ」

はいつ聞いたワニザメは、「ええが^{んべ}」て言うわけで、ずうつと並んで、こつちの岸から向うの岸までワニザメ並んだ。得意になつて白兔は、ほこピョンコピョンコと跳ねて向う岸までついて陸さ上がってから言うどええが^{つた}げんど、いま

一步という陸さ上がるつていうとき、

「何だ、お前だ、おれに騙さつたんだ。数なの、白兔なの集める気なの何もない
なだ。お前の背中渡つて、向う岸さ来^くつだくて、こういうこと言つたんだつた」

したれば、一匹のワニザメはガブリと食^くわえて、皮をはいでしまったんだどはあ、
兔の。ほうして皮剥がつて、白兔は何とも仕様なくて痛くて痛くていた。ほこさ
いろいろな神さまがずうつと来て、

「何しつた、兔」

「こういうわけで…」

て言うたれば、

「ああ、そうか、ほんではお前、海の水さ入れ。んだどたちまち毛が生える」

はいつ聞いて、兔は海の水に入つたらば、痛くて痛くてなんね。ビリビリ、ビ
リビリで、塩っぱいもんだから。ほうしてキャンキャンて泣いでいだらば、袋か
ついだ神々さまのいろいろな荷物背負つた一人の、また神さま居だった。したれ
ばその神さま親切で、

「お前、ほだごどして駄目だ。きれいな水で体洗って、して、蒲の穂さ転がれ、んだどええから」

て、ほうしてほういう風にしたらば、やっぱり元の白兔になったけど。どんぴんからりん、すっからりん。

26 須佐男命

335

むかしむかし、須佐男命さまでいう偉い人がずうっと旅したれば、川上の方から箸が流ってきた。箸流つて来るのには、この上にも人が住んでいんなだべていうわけで、ほこ、ずうっと登って行つたれば、村中みな泣いっただけはあ。

「なして、村中泣いでいるんだ」

て言うたれば、

「実は、ここに何か妖怪変化のような者いて、人年貢上げねど、全部田畑荒さつ

でしまうなだはあ」

「妖怪変化ていうの、どういふのだ」

て言うたらば、

「頭が八つある蛇だ。いわゆる八股の大蛇おろちていふ蛇だ」

「そうか、んだらば、おれがはいつ退治してやる」

ほういふわけで、

「八つのカメさ並々と酒汲いでおけ」

ほして、人身御供になる娘とすりかえて、酒を置いて、そういう風に教えだ。

村中の人あ、みなカメさ並々と酒ばそそいで、待つてだれば、やつぱり八股の大蛇が来て、八つのカメさ八つの頭つつこんで、蛇は酒大好きなもんだから、ズワズワ飲んだ。

こころでええと思つた須佐男命さま行つて、片端から、はいつ、ぶつた切つてその八股の大蛇ば退治した。ほうしてその蛇ば切つて行つたらば、尻尾の方にチャガランていふ音する。おかしいなあと思つて切り開いてみたらば、中から一振り

の刀が出はつてきた。それがアメノムラクモの劔と名付けて、天子様の三種の神器、それ持たねど、天子さま継承さんねていう。ほして刀をお土産に、また人身御供になるところの娘はクシナダ姫ていうた。そして、クシナダ姫もお伴してゆうゆうと引上げてきた。どんぴんからりん、すっからりん。

27 日本武尊

336

むかしむかし、日本武尊さまていう人が、天皇陛下の命令でエゾ征伐に行つた。ところが、丁度春先なもんだから、いろいろ戦争してうちに、賊軍から火吹つかけらつた。あつちからもこつちからも、放火さつで、ほしてドンドン、ドンドンその火がせまつてきて、あわや日本武尊さま危くなつた。ほん時、腰の名刀抜いて、草をなぎはらつた。したらば、あにはからんや、今までこつちの方さ吹いだ風が、逆に変つて、賊の方さどんどん、どんどん吹いて、賊がたちまちやらつ

でしまった。その刀が、今までアメノムラクモの劔で言うたげんども、ほん時から、クサナギの劔で命名したんだけど。

28 小僧 持念

337

むかしむかし、榎下の宿さ、持念という小坊主이었다。

ところがとつても、はいつ頓智もええし、頭もええ。村からとつても評判のええ小僧コだった。ほして村中では、何とか殿さまみてみだい、殿さま見た人ざあ、一人もいね。ほういうわけで、

「こりや、持念どの、なぜか殿さま見る方法ないか」て相談した。

「いやいや、いと易いことでございます」

て言うた。ほしてある時、持念が他の人と代つて、殿さまさ年貢米背負つて行つた。ほうしたら、その当時とつても鷹狩りが流行^{はや}つてだ。

「これ、小僧、小僧、お前のとこの奥山の方と聞いているが、お前の方に鷹いねが」

「はい、畏まりました。裏の山さ鷹が巢かけて、せっせと餌運んでいっから、よっぽど大きくなった」

「そうか、ほの鷹を取りに、余が参るから案内いたせ」

「はい、かしこまりました」

ほうして約束して帰ってきて、

「村の衆、いつのいつか、殿さまがお出になる。みんなとくと御覧になっどええ」というたところが、無礼討ちになosalれっど、部落から縄付き出したり、死亡者出したりすつど悪れ。何とかこいつ止めでもらわんなねていうわけで、また小坊主んどこさ相談に行った。

「いやいや、こういうわけで、部落の者が相談した結果、こういう風に一決したから、お前の智恵でやめてもらわんねが」

「いや、それもいと易いやすごんでござります」

て、けろつとしたもんだ。で、また年貢背負つて行つた。殿さまお目通りかなつて、

「どうだ小坊主、鷹は大きくなつたか」

「はい、大分大きくなつて毎日ピイヒヨロロ、ピイヒヨロロで鳴いております」

「おい、小坊主、それは鷹でなくて、トビだ。行くのやめた」
て、やめたけど。どんぴんからりん、すつからりん。

29 熊の忠告

338

むかしむかし、秋晴れの日、友だち二人して山さ栗拾いに行つた。ほうして一生懸命そつち拾い、こつち拾いして、夢中になつて拾つたらば、ものすごい大きい熊、のつしのつしとやつて来た。ほしたれば一人の人は、いきなり木の上さ登つた。相手の人は、ほれ「熊来た」て教えられつど、その人も逃げんなだつた

げんども、一等最初発見した人は、自分の身ばかり大事で、友だちさ教えねで、自分ばかり木さ登った。ほうしたれば友だちは逃げる暇なくてはあ、そこさコロツと死んだふりした。ほして、はいつ木の上から眺めっだ。

ところが熊、ほっちフウフウ、こっちやフウフウてやったりしたけあ、耳先で何か喋ったの見た。ほして、二、三回、こだえして手でひっくらかえしたり、もっくらかえしたりして見っだけずあ、熊がかまねではあ、死んだもんだと思つてはあ、ずうつと山の中さ、のっしのっしと行つてしまった。ほして木から落つてきた人は、

「おいおい、君、君、お前さ何か熊言つたようだけあ、何か言うたもんだか」
て言うた。

「んだ」

「何て言うた」
なえ

「友だちの危険かえりみないで自分ばかり逃げるような人と、今後一切付き合うな
て言うた」

ていうたど。どんぴんからりん、すっからりん。

30 平

林

339

むかしむかし、江戸にうすのろな徒弟^{でっち}さんだったど。旦那さんから、

「ええか、この手紙、この家さ持つて行くんだぞ」

て、宛名書いてきたど。ほの宛名なんて書いたというど、平林と書いて、

「ここさ持つて行けな」

て教えらった。

「ええか、平林（ひらばやし）ていうんだぞ、ええか忘^わせんなよ」

「はい、平林、はい平林、わかりました」

て出かけて行った。途中まで行ったらば、ある人が雑魚釣りしってたつけ。ほこ

さつとまっつて見っただ。

「おお、舐めだ、舐めだ。食った」

「こら、小僧、へらへら言うな。まだ食ったでなくて、匂いかいだんだ」

いや、雑魚釣りと来てからはあ、その徒弟は面白くて面白くて、ほこ離れらね。

「ほんで何釣れるんだい」

「鮒、鯉、鯉なの一尺五寸もあるような釣る」

て言うた。

「はあ」

まずはほこで雑魚釣りさ、からぐて（からかつて）はあ、平林あとんと忘せだはあ。

「ああ、いけねえ、おれ、今からお使いに行かんねんだった」

て言うわけで、ほつからワッショワッショで走って江戸の町まで行ったわけだ。

ほして、

「はて、何^なえて言うがった。一尺五寸でない、鮒でないし、鯉でないし、聞いて

みるに越したことない」

て言うわけで、

「ちよっとお尋ねします。この宛名ですけども、こりや、何^なえて読むなだべっす」
て聞いた。見っだけあ、

「こりや、ヒラリンさんだな」

「ヒラリン、ちよえっとおかしいな、ヒラリンさんの家どこだけべっす、ヒラリンさん」

なんぼ言うて歩つてもわかんね。

「ヒラリンで言ねがったな」

別な人に聞いてみたれば、

「ああ、ヘイリンだ」

て言うた。

「ヘイリン、ヘイリンさん」

なんぼ言うてもわからね。また別な人に聞いてみたれば、

「なんだこりや、イチハチジュウノヘイキキだべ」

「ははあ、ほだごども言^やねがったなあ」

また別の人に聞いたれば、

「はあ、ほんね、ほんね、これはヘイキキなていうのではない、これはイチハチジュウノボクボクって読むんだ」

ほして、ほの人はさつきから教えらったな、

「ヒラバヤシさんか、ヘイリンさんか、イチハチジュウノボクボク」

て、何かの売り声みたいして行っただげんど、とうとう探しあぐねでしまったぞ。んだからお使いざあ、しつかりすんなねもんだて、昔の人は言うたもんだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

31 狐と田っ螺ぶ

むかしむかし、田んぼで狐と田螺が論判になったけど。

「狐なて、早いようだげんど、田螺から見つど、遅い」

「べらぼう。ほだな足もないものから見つど、おれあ、一跳ねだつて、お前だの半日ぐらい跳ねるつだな、とんでもない」

「んだらば、駈はけはしすつか」

「ええつだな」

田螺は、

「ええか、狐さん、おれがヨイ・ドン掛けつから、ほんどき、お前一緒に走んなだぞ」

「ああ、ええ、ヨイ・ドンなど、どうでもええから」

「んだら、今から走んぞ」というわけで、二人はほこでスタートラインについたわけだ。ほしたけあ、田螺はいきなり狐の尻尾しりぼえさ、ピターツとくつついだ。田螺

の蓋で押えだ。ほして、「ヨーイ・ドン」。

いや、狐は、「どうせ、おれにはかなうまい」と思ったげんど、競争だから、田んぼ道走った。スタコラ、スタコラ走って行った。ほして向うの決勝点どこまで行つて、くらつとひっくり返つて、

「大体、どこら走つて来んべ」

と思つて、まず見てみつかと思つてうしろ向きになつて見た。ほん時田螺はちよえつと離していて、なんぼ見ても見えね。一生懸命キヨロキヨロていつどき、

「おう、狐君、狐君、こつちだぞはあ、お前おそいもんだなあ」

て言うけあ、はつとこつち向いたけあ、田螺いた。

「いやいや、負けました」

て言うたて。んだからあんまり自慢するもんでないもんだど。どんぴんからりん、すつからりん。

32 藤蔓のこぶ

341

92

むかしむかし、田舎のずうつと山奥さ引っこんだある村あるんだけど。

ほこである人が腹痛くした。バダバダ、バダバダ腹痛くなつた。医者なていねもんだから、なぜしたらええもんだかと思つて、お寺さまさ聞きに行つた。ほうしたれば、お寺さま、

「藤蔓のこぶ、ほいつ煎じて吞ませろ」

ほうして探して藤蔓のこぶ、家さ持つてきて、煎じて飲ませだれば、スパツと治つた。

「まず、ええがつた」

ほだえしているうちに、その人は眼病になつた。まなぐ目は真赤になつて、ゆずいしはれできたようだし、うまくないようだ。したれば、お寺さまさ聞きに行つたら、お寺さま、また、

「藤蔓のこぶ煎じて、そいつでひたせ」

て言うた。ほうしてしてみたれば、案の定、ツルツと治った。

「いやいや、藤蔓のこぶさあ、ええもんだ」

ほだえしてるうちに馬、さかり来たがして、馬逃げてしまった。なんぼ探しても馬いね。仕様ないから、またお寺さまさ聞き行ったらば、

「藤蔓のこぶ煎じておけ、んだど馬帰ってくるべ」

てだど。

「んであ」ていうわけで、藤蔓のこぶ煎じんべど思つて行つたげんど、ほんどきは何の調子だか、手前には藤蔓のこぶない。だんだえ山奥さ入つてはあ、暗くなるようになった。ほんでも馬一匹ていうど、大した金なもんだから、まず何とかして、藤蔓のこぶさがしさんなねと思つて行つたれば、ガサガサて音すつから、そこさ行つてみたれば、ちゃんと自分の馬、ほこさ居だつけ。ほんでほの百姓がさどつたつて。

「ああ、やっぱりお寺さま、えらいんだ。藤蔓のこぶていうて呉^けだなで、藤蔓のこぶ探しに行つて、こりや馬見^めけだ。ちようど薬と同じだ」

て悟ったけど。どんぴんからりん、すっからりん。

33 泥棒治す薬

342

むかしむかし、何でも治すという医者いだけど。ほして大がいの病気はスパスパ治す。いや治す腕も大したもんだげんども、ホラ吹くのも大したもんだから、村人は、

「あの医者、一つひっこませて呉らんかね」
という気持もあったわけだど。ところが、折々みな考えた。

「ほだらば、何ええがんべ」

「いや、泥棒治す薬ないうな、あんまい」

「ほいつあ、ないわけだな。んだらば」
というわけで、

「先生、泥棒治す薬さあ、あるもんだか」

「ある、ある」

「はあ」

ある時、村人で、あつという間に泥棒してしまった。悪れぐもないんだげんども、盗癖というんだか、癖で自分がすねべ、すねべと思つても、はつと泥棒してしまう人이었다。

んで、誰にも見けらんねでいだげんども、ほの人は〈粉糠盗人〉なて言れる。大きいこともしねげんども、盗み癖は何ったて治らね人이었다。

「んでは、ほの薬もらつて見つか」

て言うたど。したれば、村の人はみんな言うたど。

「ああ、なんだ君、泥棒しつたのか」

「いやいや、ほうでないげんども」なて、ちよえつと誤魔化して、ほの薬もらつた。ほして、

「この薬は泥棒すつたくなつたら飲め」

て教えらった。夜中になって、ほの薬飲んで、

「まさか、ほだごどあんまい」

と思つて行つて、泥棒すつと思つて人の家さ忍び込もうと思つた頃、何だて咳出て、咳出て、咳ばかりでない。アクシヨ、クシヤミも出る。何とも、アクシヨと咳の連発すんのではあ、人の家さとても入らんねくて戻つてきた。ほしたけあ、
「何たった」て、村の人に聞がつて、

「いや、効く薬だ、効く薬だ」

て。ほしてほの薬は泥棒ば治す薬だけど。決して、ほの薬飲んでから、泥棒さんねけど。どんびんからりん、すっからりん。

34 嘘つき息子

343

むかしむかし、ある村にとつても嘘こきで嘘こきで、何とも仕樣ない息子いだつた。親父は心配して心配していた。嘘とホラのぶつ通し、何でも、いやまず、人目悪^われくて仕樣ない。

「こだな野郎、投げて来んなね」

というわけで、親父は俵さくるんで、ほして息子ひつかついで行つた。ほして村はずれまで来たらば、村はずれの酒屋のどこまで来たらば、酒の匂いプーンとして来たれば、親父は我慢さんねぐなつた。ほして息子ば家の前の柿の木さ吊るさげて酒飲み入つて行つた。ほしたれば俵の中さ入つた息子は、ほれ、向うから腰まげたじんつあ来た。

「若くなれ、若くなれ、若くなれ」

て言うた。何だと思つて、じんつあ、ひよいと腰伸ばして、杖棒^{つれんぼ}つっぱつて見たれば、「若くなれ、若くなれ」て言うた。

「若くなれなて、どういうわけだ」

「いやいや、じんつあ、じんつあ、おれもお前ぐらいな年だった。この俵に入つて、《若くなれ、若くなれ》て言うたれば、こりやこの通り若くなつた」

「何だ、若くなつたなて、若くなつたなていうどこでない。いや、つうと若くなり過ぎた」

「どうだ、じんつあ、入つてみねが」

「若くなんならええな、んでは入らせてもらうか」

「んでは、糸目解いでしろ」

て言うて、ほの中さ、じんつあ代りに入つた。ほうして、タツタツタツタツと家さ戻つて行つたはあ。親父はほだごと知しやねんだし、酒ある程度飲んで、ええ機嫌になつたもんだから、「野郎、一つ」と思つて出はつてきたら、

「若くなれ、若くなれ」

なて言うな、ちよえつと見た。したればええじんつあ、ほれ、俵さくるまつてぶら下つていだけ。話聞いて、

「なんだ、おら家の野郎、ほに、ほだごどばりいたずらして、おえねえ（いけない）野郎だ」

て言うわけで、また、

「こらこら、この野郎」

て、また押えらつて俵さ入れらつてしまった。して、ひっかついで、

「こんどは川さぶち投げて呉んなね」

と思った。ほして俵さくるんでひっかついで、トコトコ行つたれば、また酒屋
んどこまで行つたら、酒ぶーんとしてきたれば、我慢さんねぐなつた。んでまた
柿の木さぶら下げておいた。

と、向うから杖ついだ座頭来た。ほしたけあ、「目の用心、目の用心」て始めた。

「何んだ、目の用心、目の用心で、おれは目の見えねえもんだげんども何者だ」

「いやいや、実はおれも盲目だった。俵の中さ入って、目の用心、目の用心で、

千人の目さふれつど目開くまなくていうたもんだ。ほりや、おれあパツチリ開いた、お

坊さま、解いで下ろしてけろ、まず」

ほして手さぐりで結び目^め見けで、坊さま、おろしてけだ。二人は交代した。ほして家さ戻ってきた。ところが親父は酒ええころかげん飲んで行つてみたれば、座頭入つて、「目の用心、目の用心」て、いた。

「いや、わけ聞かねてもわかつたはあ。さつきそういうことあつたから、いやいや坊さま、失礼いたしました。おら家の息子のいたずら野郎、いたずら野郎で、何とも仕樣ない野郎だず」

ていうわけで、ほして坊さんば解きはなして家さきた。

「いやいや、家の野郎には仕方ないげんど、他で嘘つかれるより、家の中で嘘つくぐらい仕方ないべはあ」

て、ほれから投げんなあきらめだけど。どんぴんからりん、すつからりん。

35 ほ ら 吹 き

344

むかし、あるところに、ホラ吹きな人で、

「いやいや、すばらしい大きい蛇見てきた。胴廻り一間。長さ三十尺の大蛇見
きた」

「ほだえ大きい蛇、いんまいな。ほだえ長いな、いんまいな」

「ほんだらば、二十尺かな」

「いやいや、二十尺なていうなも居ね」

「んでは十五尺だ」

「十五尺なても、いねなあ」

だんだえ小つちやくなつて一間になつてしまった。「んだら、お前、胴の周
り一間、長さ一間ていうど、蛇は丸っこいべな」

ほしてホラていうこと一ぺんで分ったけど。どんびんからりん、すっからりん。

36 狼 千 匹

ほら吹きが、「村はずれまで行ったらば、千匹の狼が出てきた」て語った。

「千匹なていう狼、いんまいなあ」

「いや、千匹あいねげんど、何でかんで、ありや五、六百匹いた」

「五、六百なて言うたら、山うずまるほどになんべな」

「五、六百いねごんだら、百匹はいたまな」

「百の狼、オーて音立てたら、サイレンよりまだ大きい音する」

だんだん少なくなつて、五、六十もいね。

「ほんて見たなだかよ、狼」

「いやいや、見ねげんども、何だか、ガサガサっていうたから、ほのぐらい居だつたかと思つて」て言うた。どんぴんからりん、すつからりん。

37 狸の八畳敷

346

むかしむかし、ある山寺に和尚さん一人だけで、ほしてほの友だちに与平さんという人いだ。二人はとつても仲よしで、ほして与平さんが行かねど、お寺さま来たり、和尚さま行かねど、与平さんが行ったりして、仲よくしつた。

ある晩、ほの与平さんが御飯どき来た。めったえ（めったに）御飯すぎてからばり来るんたげんども、て思っていたげんど、仕方ない御飯時きたもんだから、御馳走したり何かえしつた。ほだえしているうち、「御馳走さま」して行つた。ちょうど後さまた与平さんが来た。

「なんだ与平さん、いま御馳走してやったに、何か忘せたか」

「忘せたかなて、和尚さま、おれ今来たばりつたな」

嘘つくような与平さんでもない。

「へえ、不思議だな、ははあ、さては分つた。与平さん、こいつあ、狸の仕業だ」
「ほうか」

与平さんも心配して、

「和尚さま、狸なの食べらったり、いじめらったりすつどなんね」

と思つて、次の晩、かげの部屋さ、そつと様子見にきた。ほしたれば、ほれ、前の晩御馳走になつていったな、忘れらんねくて、また狸は次の日やつてきた。ほして与平さんが見たれば、正面から見つど自分とそっくり。

「あららら……てやんなねぐらい似つた」

んだげんど、脇から見つど、ほの襖さ影うつるの見つど、尻尾と狸の姿、そつくり写らんなど。自分の姿に化けではいつけんども、影プチまでは化けらんねなだて、そういう風に見つた。ほだえして話はだんだえ進んでいるうち、和尚さんも、とにかくこりや、あやしいなてわかつたもんだから、囲炉裏の中さ石二つ焼いっだ。いざつていう時、その焼き石ぶつつけて呉る勘定で焼いっだれば、だんだえ話はいろいろになつて、進んで行つた。ほだえしているうち、与平さんに化けた狸、だんだえ下の方さ手やつたと思つたら、するすると金玉伸びて行つて八畳敷いっばいなるようになってしまつて、いまつうとで、あわや和尚さまが八

畳敷の毛皮の風呂敷でさらわれようとしたとき、和尚さんがすかさず真赤ぐ焼
げった石、十能で風呂敷さちよつと上げて呉^けだ。したればキヤーツ、アチチチ：
ていうわけで、もんどり打って狸は逃げて行つてしまつたど。ほして与平さんが
ほこさ出はつて行つて、

「いや、和尚さま、ええがった、ええがった」て、

「いや、本当のおれだど、すばらしく火傷^{やけど}したつたべ。狸でええがった」

ていうたけど。風呂敷出した狸は焼け石でやつつけたけど。どんぴんからりん、
すっからりん。

38 まま子の豆

347

むかしむかし、ある村に、とつてもひどいまま母^{かか}いだっけど。ほんで、ほこのうちも百姓で娘一人いで、ほして百姓、畑七反、田六反歩ばかり作った中農^{なかぬし}だけど。ほしてある時、まま母が娘さ、

「この豆一日でみな蒔^まいてこい」
て言^やつで、豆蒔^まきに行^いつた。

「出ねどええが、芽が出ねど家さなの置かねぞ」

そうして渡した豆は煎り豆だつたど。んだからなんぼ蒔^まいだて出るわけないんだど。ほして、んだげんども、娘は一生懸命、片脇^{かたわき}から、ちよこちよこ、ちよこちよこ豆蒔^まきしてつた。飛ばして蒔^まいたなんでも言^やんねし、足のアゴさ合せて、ちよこりちよこりで行^いつて、暗くなるまでかかつて蒔^まいできた。いつか何日も豆出ね。出ね、当たりまえだ。煎り豆だ。そうしていびらつた。

ところが真中頃^{まなかぐら}さ一本豆出た。そいつは毎日うなり立てておがる。べろべろ、

べろべろおがって行つて、ほして一本で七反歩さひろがつてしまった。ほうしてほだえ大きくなつたもんだから、継母、こんど恐つかなぐなつて、「何かある」と、こういう風に読んで娘さあやまつたんだと。

「いや、おれ悪れがつた、お前さいじわるして悪れがつた」

「お母ちゃん、ほだごどない、おれだつて一生懸命誠意つくしたんだ、ほして逝くなつたお母ちゃんさもお願ひして、なぜかかぜか、一本でもええから出るようにして呉^けらつしやいてお祈りしただけで、何にもカラクリも魔法もないんだ」

て言うたて。ほして仲悪がつた二人の仲がよくなつて、ほして秋になつて花咲いだ。ほうして豆実つてみたれば、今までの何十倍も実^なつた。二人は喜んで、ほの豆の木、木挽きに頼んで倒してみたれば、すばらしい太いがつたので、もったいないつて言うので、根つこの方^{ふた}でニコロばり切つて、はいつの中えぐつて、太鼓作つてお寺さまさ納めて、二人で仲よく暮したけど。どんぴんからりん、すつからりん。

39 嘘つきの災難

むかしむかし、嘘つきな少年いだんだけど。ある時、ほれ、山さ行つて「狼出た」ていうど、人集まつてきて面白いべと思つて、「狼きた、狼きた」て、大声たてたれば、百姓の人あ鍬ぶんなげたり、鎌ぶんなげたり、あるいは田植したなやめで、その声のする方さみな行つてみた。したければケロッと嘘だ。

「この野郎、ほに、嘘こき野郎」

て思つてだげんど、だまつていた。こんどほれ、その少年が山さ行つたれば、本^{ほん}当^て狼出てきた。

「狼だ、狼だ」

こんど、なんぼ言うても誰一人来てけねくて、狼にはあ、喰^くつがついで倒さつて、生きも絶え絶えになつて死ぬばりになつた。

「何だ、おかしげな声聞えるなあ」

というわけで、「ほんとに出だんであんまいし…」て村人行つてみたら、まず

はあ、狼にかぶつがっで、瀕死の重傷で死ぬばりになっていだっけはあ。んだから、ことの欠けた嘘さあ、つくもんでないて、昔の人あいうたもんだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

40 三人のほら吹き

349

むかしむかし、ある城下に三人の大ぼら吹きの大嘘つきいだっけど。ほしてほの話が殿さまさ聞こえて、

「んだらば、三人の大ぼら吹きの大嘘つき、余の前で嘘ついてみろ」

こういうわけで、三人が呼び出さって、殿さまの前さ行った。ほうして一人の人あ、

「実は、おれは百姓で、七反歩さ小麦蒔いだ。そうしたところが海から大きいワニザメ上ってきて、一晚のうちにっつと食^かつでしまったはあ」

「はあ、これもすばらしい話だ」

したれば一人の人あ、

「おら家でも丁度七反歩作った、ところがほこさ豆一本蒔いければ、ふたがってしまつて、七反歩ふたがってしまつて、ほして收穫してみれば、倉さ七つ半、豆あつた」

「いやいや、大したもんだ」

ていた。ところが別な人、町家の人が、

「おらえの家には、すばらしい大きな槍ある」

「なんだ槍だ」

「穂先三間、柄が十間ある」「はあ」

「お殿さまにも、ほだえ大きな槍ないべな」

「余のもとにもそういう槍はない。どうだ、その槍持つてまいれ」

殿さまに言つてしまつた。

「何ていう槍だ」

「こいつぁ、嘘つく槍だ」

嘘つく槍、前の人二人とも嘘なもんだから、はいつ付く槍出てしまつてはあ、ほの二人負けてしました。

「いや、お殿さま、持つて来るな結構だげんども、ここさ持つて来つど、お殿さまの喉元まで刺さつてしまふ」

て言うたつて。

「ほんでは駄目だ」

て、ほんで殿さまも持つてこいと言ねがつたど。どんぴんからりん、すつかりん。

むかしから、〈旅は道づれ〉なて言うて、一緒になった人どお国自慢話するのが定法だった。ある時舟さのつて、ずうつとお国自慢しながら行つた。ほうしたれば、秋田の人は、

「おら方のフキはすばらしい大きなフキだ。小^ちつちやこいフキでも唐傘ぐらいある」

「うわあ、んでは大きいフキていうど、どのぐらいある」

「五里四方あるまな」

「五里四方、ほのフキ、なんていうフキだ」

ほしたれば、

「ホラフキだ」

て言うたど。一方の方は、

「おら方の大仏さま、大きい。奈良の大仏さま、これは大したもんだ。坐つてで

四丈八尺。んだから立つどまだまだ大きいわけだ。何でも、人なの鼻の孔さ入つて、鼻の孔の中掃除するい」

したれば、山形の人はこういうこと言うた。

「おら方なの、鼻の孔から豆二俵とる」て言うた。

「いやいや、はいつには魂消た」

て、はいつには負けただけど。鼻の孔の中から豆二俵とるさあ何だど思つたれば、紅花の花、一反歩作つて、はいつの中さ豆蒔いで、さらに二俵とる話だったど。どんぴんからりん、すつからりん。

42 千里の靴

351

むかしむかし、三人の子どもいたおかちゃんがいだんだけど。男の子三人持つて、おつつあんに先立つて何とも暮すに暮さんね、みな一家心中する以外にない

と困ったもんだと思つて、んでお母ちゃんが、

「仕様ない、三人ば山奥さ捨ててくんべはあ」

というわけで、三人ばだまして山奥さ連^せで行つて、

「ええが、お母ちゃんがあそこらにええ梨の木あつどこ知つてだから、梨もいで来て呉^{たいち}つから、お前だこの平に待つてろなあ」

て、お母ちゃんがさつと逃げてきた。なんぼ待つてでもお母ちゃんが来ない。

そのうち暗くなつてしまつたはあ。ほのうち二人は泣いでしまつたはあ。兄んつあん二人あ、したらば一番下の舎弟は泣かね。

「ほだな泣いだつてわからね。宿でも探して泊まるより他にないっだな」

て言うた。ほんではて、探してみたれば、少し下がったところに、ぼやつと灯り見えつけ。

「んでは、ほこさ行つて見んべ」

て行つて見たんだど。したればほこに年寄つたばんちやいで、

「泊めてけらつしやい」て言うたれば、

「いや、泊まるなのええげんども、ここは鬼の屋敷だ。まもなく鬼帰って来っから、お前だ食れっどなんねから、すぐ井風呂さ入ろ」

て、空井風呂さ入って蓋しつた。ほだえしてるうち間もなく鬼は山から来た。

「人くさい、人くさい、何だか人くさいな」

「ほだほだ、いま三人来たけ、んだげんど何だか、鬼くさいなて言うて、鬼来っどなんねなて、ここから逃げて行つたずはあ」

「よし、逃げて行つたごんだら仕方ない、んだらば、万里の靴では遠くまで行き過ぎっから、千里の靴出せ」

ほうして千里の靴出して、ほこらこら探す勘定だ。ほして出はつてつてしまつた。出はつて行くすぐ千里ふつとんで行つたずど、すぐ戻らんねべていうわけで、そのばんちやが、

「ええが、お前だ、今すぐ逃げろ、ほんねど鬼につかまっから」

ていうたど。三人はどんどんと逃げた。兄あんつあんだ二人は足すくんでしまつた。ほしたれば鬼、ほさ眠つたけあ、あんまり活歩して歩いたから、くたびれて

しまった。ほしてほこさすばらしいイビキ立てて眠った。

「よし、んではお前だ、ここにいろ」

て言うて、一番舎弟は、その千里の靴ぬがせだんだど。片方靴脱がせだれば、「ううん」なて眠返りした。兄んつあだ、「いやいや」なて、殺されつど思つていた。ほんでも起きね。ほして両方脱がせた。ほしたけあ、ほの一番小^ちつちやこい舎弟は、

「あんつあだ、おれさつかまつて呉^けろ」

ほして二人の兄ば背中さつかまらせて、千里の靴履いで、自分の家さファアと戻つてきた。ところが、ほれ、おかあちゃんが捨てるには捨てだげんど、心配して心配して御飯も食ね、夜も寝ねでいたつたて、行つて連^せて来んなねと思つたげんど、鬼婆も恐いし、なぜすつかと思つて心配しつたどこさ、三人がもどつて行つたから喜んだ。

「ああ、ええがった、こんどからお前だば、何^{なん}た苦勞しても捨てねはあ」
て言うて、ほの話はずうつと拵がって、一足千里行ぐていうなで、ほこの子ど

もだ、飛脚頭に殿さまから頼まつて、なつたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

43 八郎太郎

352

むかしむかし、南部の九戸くのへというところに、八郎太郎というないだんだけど。ほの子どもは体格もええし、中々利口だった。ほして毎日、田舎なもんだから、山さ遊びに行ったり、野原さ遊び行ったりしていた。

ある時、喉乾いて喉乾いて仕様ない。手で冷たい泉ばすくって飲むべと思ったれば、手さイモホリ（イモリ）入ってきた。

「ああ、かつじえげだな（こんなつまらぬ）イモホリ、何だ」
ていうわけで、ぶん投げた。

次の水すくったら、またイモホリ入って来た。三回も四回も同じこと始まった。

「ほんでは仕方ない。喉乾いで何とも仕方ない」

て、飲んでみたばうまいこと、うまいこと、どくどく、どくどく飲んでしまつたうち、何だか体大きくなつてはあ、背なの何十倍となつてしまつた。ほして鳥の巢などみな手で届くようになった。木なのシンポエ折^おだたり何かえ^{なん}するい。

「へえ、不思議なこともあるもんだ。んだげんども何だて喉乾いて喉乾いてなんね」

ほつつの泉あつべ、こつちの川集め、モツコ山なていうの崩して堰止めて飲んでも、何とも仕様なくなつた。ほして立つているうちは人間だげんど、しゃがんでみつど何だかこの湖の中に蛇いだみだいだ。おかしいなと思つていたれば、自分の姿蛇になつていだんだけどはあ。

「はあ、こりや、おれあ蛇になつたんだなあ、んだらば仕方ない、ここらさトグ口巻いて暮すかなあ」

と思つて、小^ちつちやこい泉の水飲み飲み暮すかと思つて、水飲みはだたれば（のみ始めたら）、ほこがダダダーツと落つてつて大きい湖になつたなが十和田湖だけ

ど。ほして、蛇のまま沈んでしまつて、ほれから何日何十日経つたかわかんねげ
んども、南蔵坊ていう神通力のあるお坊さんが、通りかかったれば、何だか十和
田湖に何か秘密が隠されているようだ。不思議なことあるようだというので、神
通力さ照らしてみたれば、八郎太郎が蛇の姿で中さ沈んでいる。こりや助けねく
てなんねていうわけで、法力でもつてお祈りしたれば、八郎太郎がまた人間の姿
に返つた。喜んで、

「いや、南蔵坊さま、おかげさまで助けらつた」

ほんどき、南蔵坊が、

「ええか、お前は人よりも体も大きいし、体格もすばらしいから、人間のために
なるようなことしなさい」

て言つて、「はい、そうします」というわけで。ところが別れつどき、その南蔵
坊が、

「お前に金のワラジ呉かねつから、金のワラジ切つたどこがお前の住み家だ」

そういう風に教えて、かき消すように見えねぐなつた。ところがほれ、八郎太

郎がシズク石川なて、今もあるんだげんども、ほこは先に、川、ほっちにもこつちにもあつて、大変あばれてひどいのば一か所き集めて呉^けだり、ほっち改修したりしていた。ところがそこら大変氣に入つたもんだから、

「ここらで暮すかなあ」

と思つて、んだげんど金のワラジ切んね。おかしいなあ、金のワラジ切つたどごで暮せて言^やつだんだから、金のワラジ切んねのでは仕方ない。どれ、んだらこすぐつて切らして呉つかていうわけで、金のワラジ、ジャガジャガこすつた。ところがとんな事始まつた。ほの音聞いだけあ、十里四方の犬だ、みなぶつ魂消て、ほして遠吠え始めた。集まつて来て、ウワン、ウワンで、はいつで八郎太郎も何とも仕様なくて、ほつから逃げて、西の方西の方へて、ほして海岸端まで走つて行つた。ほしたれば、丁度ほこでワラジ切つたつけて。ほこが今の八郎潟で、ほこさ八郎潟の主になつて、またそろりそろりと入つて行つた。八郎太郎が入つて行つたから、今でも八郎潟で言うてる。

時同じうして、ほの頃、やつぱりきれいな鄙^{ひな}には稀な娘さんいだったて。竜子^{たつこ}て

いう名前だった。ほの人も今よりまだ泉、山のきれいな泉で顔洗ったり飲んだりすつど、まだきれいになるて言つて、山さ行つたれば喉乾いで喉乾いて、ほれで何とも仕様なくて、堰止めでのんで、居所定めたところが、田沢湖だったつて。して田沢湖の竜がいわゆるタツ子姫で、十和田湖さ居城置いたのは、八郎太郎だった。それが年一回会う。ほの姿見たことないげんども、田沢湖の水が真つ白になることがある。それが八郎太郎とタツ子姫の会う日だと、昔の人は言うたけど。どんぴんからりん、すつからりん。

44 天人女房

353

むかしむかし、漁師が釣竿かついで釣りさ出かけた。ほして三保の松原いうどこまで行ったら、なんだかきれいな香りがする。

「こだな匂いかいだことない、なにだべなあ」

と思つて匂いの方、ふと見たれば、ほの海できれいな若い娘が、七人ばりすいすい、すいすいと水浴びした。ほして、

「ああ、天人というな、ああいうなだかなあ」

て思つて眺めつた。ほだげんども天人、おれ見てきたなて言うたて、誰も本氣すねべど、こりや、何か証拠ないべかと思つて、ほこらこら見たれば、ほの松の木さ衣がかかつてだ。

「ははあ、これもつて行つて見せれば、みんな本氣するわけだ」

というわけで、がらがら行つて着物一枚とつたわけだ。ところが人間の氣配さ感づいたほの天人が、海から上がつて次から次へと着物きて天さのぼつて行つてしまった。んだげんど一人の天人だけは、ほの着物取らつで上らんね。ほうして、

「どうか一つ、ほの着物返してけらっしゃい」

さめざめと頼むもんだから、こころのやさしい漁師が、

「んだら、返す。んだげんども天人というのはすばらしい舞上手ときいでる。何とか舞を見せて呉ねが」

「いや、おやすい御用でございます」

「んだげんども、おれがこの着物渡したら、すうつとお前逃げて行つてしまわねえが」ていうたら、

「天人は決して嘘つきません」

ていうた。ほしてほの着物渡したれば、すばらしい舞をまいながら、ゆうゆうと天に吸い込まれるように絹糸のように細くなるまで舞をまつて、すうつと居ねぐなつたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

45 見るなの座敷

354

むかしむかし、あるどころにじんつあい、ほして自分の家の庭の梅の木、古くなつたから、実もあんまりなんねしはあ、花もたと咲かねぐなつたから、切つてしまふかなあど鋸持^{たが}つて、鋸入れつど思つたれば、何だかパツと明るくなつた

ような気がする。はつとうしろ振り返ったら、きれいな娘が、

「何とかほの木切んなやめでけらっしやい」

というわけだけど。

「実は、あの、ずうっと前から、ほの木ど仲よしにさせてもらつてだ者だげんども」

というわけで、見れば風体いやしからぬ者だし、こりや何かあるなと思つて、

「んではやめんべ」

というわけで、鋸置いた。その娘、

「んだらあたしと一緒にござつてけらっしやい」

というわけで、おっかけで行つた。ほうしてずうっと行くところまで行つたれば

川流つでいだつけ。ほの川の香のええごど、全部酒だけど。ほして、

「ここが、おらえの家だから、んだらまず」

て、挨拶して家さ行つてみた。ほうしたれば一月から十二月までの部屋あるんだけど。ほうして、

「ここずうっと、あなた自由に御覧になつてええから、ただし、二月の部屋だけ見ねでもらいたい」

て、こういうわけだけど。んで見んて言つだもんだから、一月の部屋見た。ほうしたれば、松竹梅、さんぼうさ餅とミカンなど上がつて、ちゃんとお正月の準備出つだけど。

二月は見んて言つだから見ねで、三月。三月の部屋さ行つてみたれば、雛壇があつて、三人官女、五人ばやしがあつて、金屏風なてあつて、なかなか立派なきれいな部屋だ。こんど四月。

四月の部屋さ行つたらばお釈迦さまのお祭り、甘茶なの竹の柄杓でかけたり、花見灯籠あつたり、木蓮の花など咲いっただんだけど。ほれから今度、五月の部屋さ行つた。

五月の部屋さ行つた。五月の部屋では、幟り、矢車、武者人形、五月節句だけど。ほれもまたきれいだ。うつとり見つた。ほしてこんど六月の部屋さ行つた。ほうしたれば六月の部屋さ行つて見たれば富士山の山開き、お供えものいっぱい

持つて、奉納する人、行列で登って行んけど。ほこの登っていくどこ描いた襖あつたり、屏風あつたりしてまことにきれいだ。

七月。こんど七月の部屋さ行ったらば、七夕、竹さ金銀の短冊さがつたり、願いごとを書いだり、何かえしたな七夕さま、こんど銀河などずうつと見えてきて、ヒコ星とオリ姫の会う様など、まずきれいに描つた部屋だつたど。

それから八月の部屋。これはお月見。ススキ、お団子、芋など上げて十五夜のお月見しつたど。

こんど九月。九月に入ったらば百姓の稲刈り、案山子^{なに}なの立てたり何かいして、雀除^よけなのしたど、これもきれいに整つた部屋だけど。

ほれから十月さ入ったら、菊人形。牛若丸、弁慶なの、ほれから浦島太郎なのすばらしくええあんばいに描かつていた。ほうしてはいつが生きつた人形のように見えつて。

十一月、七・五・三のお宮詣り。

十二月さ行つたればこんど結婚式のどこ。これもまたきれいな絵馬でも眺める

ようだった。ほして、

「ああ、ええがったなあ」

と思つていた。んだげんど、見んて言つた部屋見つだくなつて見つだくなつて、何とも仕様なくて、ほして、二月の部屋開けてみれば、三つの卵あるんだけど。ほして三人の子どもがいて、ほこささっきの娘がしょんぼりと立つていだんだけど。ほして開けんていうどこ開けたもんだから、あわてて子どもがこっちの方見つた。ほして見たれば、何だかうグイスの卵みたいなものあつから、

「あら、きれいだごど、梅干みたい色つிட்ட卵だ、こりや」

なて、持くべと思つたら手ばずして落したれば、他の二つもぼっこつてしまつた。したればその三人の子ども死んでしまつたんだとはあ、したけあ、

「あら、見んてあれほどお願いするに、どうして、あなた見てけだべ、ほんではわかんねつたなあ」

て言うたと思つたら、すうつとその娘さんが消えてしまつて、

「ありや、娘消だ。不思議なこともあるもんだ」

と思ったれば、いつの間にか自分の庭さ鋸持^{たが}つてしょんぼり立っていだっけど。んだから、見るななて言うどこ無理に決して見らんねもんだど。どんぴんからりん、すっからりん。

46 こ う も り

355

大昔、獣と鳥と戦争はじまったど。いやどっちも勝負つかねくて、永く永くかった。して獣が優勢になつて来つど、こうもりていう動物は、

「おれは足四本あつし、乳で子ども育てんなだから、おれは獣の仲間っだな」
て、獣さ混^まじやる。

そだえしているうち、鳥が優勢になつてくる。鳥の方あ強くなつてくつど、
「おれは、羽根あつから鳥っだな」

こんどは鳥の仲間になつてしまう。ほして強い方さばかり味方する。ほだえ

して、永年喧嘩しているうち、両方どちらからともなく、

「ほだえ喧嘩ばりしていらんねべな」

て、講和が成り立って仲ええぐなった。ところがこうもりていうものは、鳥だ
獣だて強い方さばり行つたもんだから、両方から毛嫌いさつで、

「お前なんか、おら方の仲間でない」

獣から言^やつた。鳥からも、「お前なんか、おら方の仲間でない」て言^やつた。ほし
て鳥が行動すんのは日中、ほれから獣が行動すんが、夜も目が見えつから、お
前だ夜もすると、こういうことになった。ほんでこうもりは、夕方わずかだけ出
はつて、虫食ったり、食いもの食つたりすんなねんだけど。んだから、喧嘩なつ
たのさ、荒い方さ味方ばりして、ほつちや味方し、こつちや味方すんなば、へこう
もりみたいだ」て今も言うのだど。どんぴんからりん、すつからりん。

47 貧乏人の大金

356

130

むかしむかし、殿さま、腹痛くしてバダバダ、バダバダ腹痛くした。誰も治さんね。医者も典者もかなわね。んで殿さま、

「おれば治した者には、望みのものやる」

触れ廻した。ところがある家に伝家のすばらしい薬草があった。はいつが入山から、ほれから手前山から、沢から峯から、いろいろ、七つ八つの薬草は二斗もある水ば、トロリトロリと二合ぐらいに煮つめて、ほしてはいつ飲むんだら、何た腹痛でも治る。こういう風な薬あったもんだから、はいつ殿さまさ持つて行つて、飲ませたれば、胸の溜飲が下がるようだて言うた。ぐうって音立てて、腹鳴りして、たちまち腹治った。

「いやあ、楽になったもんだ。んでは欲しいものは何だ」

て、こういう風に言うたらば、

「いや、おれは今までいろいろしてきたげんども、貧乏ばっかりして何ともなん

ねがった。お殿さま、錢いただがんねべか」

「いや、ほだなお安い御用だ」

というわけで、何がしの錢もらつて、ほして家さ歸つてきた。ほの金つたつて、御褒美としてける錢だから、百、二百の錢でない。今だら億という金だったど。ほんでどさしまつたらええが分んね。天井さ下げても、こりや盗まれんべし、タンスさ入つてもねらわれんべし、どさ置いたらええがなあて考えた。

「ははあ、んだ」
というわけで、縁の下さぶら下つた。ほして稼ぎ行つてきてはあ、はいつ竿でばっぱと払つてみて、あつかないかさぐつてみて、「あるある」
て安心した。また稼ぎに行つてきてはあ、はいつさぐんの、誰か見っだ人いだ。
ほしたけあ、

「ははあ、持ちつけね錢持ったから、家の中だと取られつどなんねど思つて、あ
だんどこさぶら下げつたな」

というわけで、誰かほいつ盗つて行つてしまつたんだとはあ。ほして、ほだご
ど知しやねで、ほの人あまた山から来て、竿でさぐつて見たれば、ないがったど。

ほしたれば、がっかりすつかと思つたれば、

「ああ、これで安心した」て言うたど。貧乏人が持ちつけね大きい銭なの持つど却つて気苦労が余計なだけだ、銭なの右から左へ、ほだえバガバガ使われるものでもないし、「ああ、ええがった」て、銭なくてええがったていうたけど。どんぴんからりん、すつからりん。

48 阿古屋姫

357

むかしむかし、京の都に右大臣藤原豊成ていうえらい人がいだんだけど。ほの豊成さまていう人は、思いやりの深い、そして人がらのええ人だったげんども、ほして天皇陛下にも重く用いらつでいだげんども、わるい友だちがいて、はいつば、妬^{しよね}んでいつわりのつげ口したんだど。したれば天皇陛下にお叱りうけて、遠い羽前国で、山形県さ流さつでしまったんだどはあ。

ほして、豊成には一人娘いで、阿古屋姫というて、鄙ひなにはまれな美人だったど。
ある晩、阿古屋姫がさびしさのあまり、琴をひき始めだんだど。ほのとき、一人の若者が現わつて、じつと琴の音さ耳かたむけていだんだけど。その次の日も、またその次の日も来た。ほしてその気配感じた阿古屋姫がちよえつと目上まなぐげて見たれば、向うの若者と目がぱつと合った。ほしたら会釈して、ただ近寄ろうともしないで、どこともなく居ねぐなつてしまった。

で、ほだなこと続いて三日目の晩、物語り始めだんだど。その若者が、「いや実はわたしは人間でない。ここの千歳山（山形市）の上にある、齡よわい九百年になる松の木のだ精だ」。ここの風に言うたんだど。ほして、

「おれが、三日後に伐り倒さつて、ほして名取川の橋流さつてその後釜になるんだ。橋になつてしまうんだ。んだから、生きつだうち、せめてもの、きれいな清い思ひ出を残したくて、お前のほの琴の音さ聞き惚れて来たんだ。さらばじゃ」
て、すうつと居ねぐなつたんだど。んで、ほの三日目の朝、阿古屋姫が朝露を踏みしだきながら、千歳山さのぼつて伐らせねべと思つて登つてみたげんども

はあ、すでに人足だ伐り倒してはあ、ほして枝落して、すっかり準備した。なんぼ頑張つて引張つても引っぱらんね。んで、阿古屋姫が行つて、はいつ、サラサラと撫でてくだれば、ずんずん下まで引き降ろすことができて、はいつ名取川さ持つて行つた。ところがほの若者の姿、何としても忘れがたくて、ほして阿古屋姫が、ほこさまた新しい松植えて呉で、ほして自分が髪切つて、尼さまになつて一生過したけど。今でも、んだから阿古屋の松という松の木が、二代目の松の木があるんだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

49 生療法は怪我のもと

358

むかし、ある人が、こういうこと考えだんだど。海の上でも歩ぐあるいようだつて。そのわけは右の足出して、右の足沈まねうち、左の足出せば行ぐゆくい。

なるほど、やっぱり、右の足沈まねうち左の足。左の足沈まねうち右の足出せ

ば、海の上でも歩ぐいようだ。實際海さ行つて実行してみたれば、なんと、二、三步も行がねうち沈んでしまつたど。んだから世の中で、出来そうで出来ないということいっぱいある。昔から（生療法は大怪我のもと）て、んだから言うたもんだど。どんびんからりん、すつからりん。

50 上と下の白

359

むかしとんとんあつたけど。

餅搗くとき、下さばり臼おかねで、上さもおいたら、餅、一度に二臼搗けるでないかて考えてみた人いだっけど。ほしてやつぱり上さ臼さげて、下さ臼おいて餅搗きすんべと思つたれば、上さ餅米入つていねわけだど。落つて来て、これも駄目だなていうて、これも失敗したっけど。どんびんからりん、すつからりん。

51 雨の降る孔

360

136

むかしむかし、雨ていうな、こりや、昔からあんまり長雨降つど嫌わつて、ほして、雨降つてくる孔だべて考えだ人いた。

ほして、舎弟と兄^あんつあと二人して、

「よし、こんど雨降る孔、叩き落すど、家漏つたりなんかしねえべ」

と、こういう風に考えて、家のぐるりばりも落してしまうべていうわけで、夜の夜中出はつて、一生懸命、長い竿、おつぷり廻した。したればほこさ親父がもどつてきて、

「こりや、こりや、にさだ、何しつた」

「雨の降る孔、叩いっだ」

「ほだんどこではわかんね。屋根の上さあがつて叩^{はた}け」

て言うたて。どんぴんからりん、すっからりん。

むかしむかし、お月さまとお天道さまど、雷さまと三人が旅した。ほして雷さま目覚ましてみたらば、お月さまもお日さまも居ねがったはあて。女中さ雷さま聞いたど。

「お月さまとお日さま、なぜした」
たれば、

「今朝早く、お月さまなの、暗いうち立ってはお、夜明けつと同時に お日さま立ってしまつたすはあ」

て、女中言うたつて。

「はあ、やつぱり月日の立つのは早いもんだなあ」
て言うたて、雷さま。んで女中聞いたつて。

「雷さま、雷さま、あなたいつ立ってござる」
「おれは、夕立ちだ」

て言うたって。どんぴんからりん、すっからりん。

53 阿弥陀と釈迦

362

むかしむかし、阿弥陀さまがお釈迦さまに髭そってもらった。ほうしたれば痛い。何とも仕様なくて声出した。

「ああ、いたい、いたい。アミダが出る」
て言うたらば、

「ほだべ、こりや、シャカサズリ（逆さ剃り）だも」
て言うたって。どんぴんからりん、すっからりん。

54 仁

王

363

むかしむかし、お仁王さま、屁たっだ。ほうしたれば、みんな村人は、くさいくさいで言うたらば、

「におうか」

て言うたつて。どんぴんからりん、すっからりん。

55 継母と白鳥

364

むかしむかし、あるところに、おつつあんとおかちゃんがい、ほして、おかちゃん病気で早く逝くなつた。子ども八人い。一番下が女で、上七人が男だつた。ほして何とも仕様ないから、おつつあんが後妻あとかがもらつた。ところが、後おかちゃんが見たところあええし、ちやちやとしてええようだげんど、根性悪

れくて、子どもさ悪れくて、何とも仕様ない、ほして何だか魔法使いらしい。何だか、一番大きい兄あんつあ、少し口答えしたらば、次の日、白鳥にさつで飛ばさつでやった。その次の日は、ほの二男、三男とはあ、次々に飛ばさつでやつてはあ、ほうして、ほいつ、つげ口すんべと思うど、にらまれつし、恐つかないから、ほの一番小ちつちやい子どもも、女の子やども言やんねくているうち、七人とも白鳥にさつで飛ばさつでしまった。

おつつあんが、ほれ、おかちゃんのきれいなさ夢中になつてゐるもんだから、子どもむずこいななの、二の次だつたど。

んだげんども、ほの一番小ちつちやこい女の子どもは、兄さんださ会いだくて、なぜしたら会えんべがなあて考えた。ほしてある日、なんとも我慢さんねくて、白鳥ていうな湖ていうどこにいていう話聞いだから、ほつからずうつと行けば沼があつから、あそこらにいだべがなあと想着て、ずうつと行つたれば、やつぱり七匹の白鳥がいだつて。して、一番妹行つたれば、傍なえさ寄つてきて、話語つだいと思つて寄くつて来くつけんども、魔法が効なえいていで、何なえつたて話にならね。こつ

ちで言うことはわかるらしく、首下げっけんども、向うでいう七人の兄さんの言葉、全然わからね。

ほだえしているうち、夜暗くなつたはあ。で、ほこさ泊ることにした。泊るつたて寒くて何とも仕様ない。七羽の白鳥が妹ばクルツと巻いで呉^けで、羽根で温めで呉で、一晚すごした。ほうしたれば枕神立って、白髪^{はく}の仙人が現わっで、

「明日、お前はここにいる蜘蛛の巣の糸集めて、はいっさ、イヒン、イヒンて三べん言うど、蜘蛛の糸がどこまでも伸びっから、さいつで布を織つて、ほして七羽の白鳥さ着物縫つて着せんね。んねど元の体になんね」

て言うて、

「お前、はいっ出来っか。期間はたつた三日しかないなだ。三日間にできっか」
「たとえ出ねつたて、やつて見ることだけはやつてみるつもりしている」

て、次の日なつたもんだから、蜘蛛の巣とつて来て、イヒン、イヒンて三べんしたれば、それ伸びっこと伸びっこと。ほいつばつむいで機織り始めて、ほして着物七っこしやえで、ほの白鳥さ着せだ。ほうしたれば着せるより早く元の兄^あん

つあんになった。次から次と人間となつて、ほして、ほつから舟でずうつと戻つてきた。はいつ見ただけあ、おかちゃんが、

「ああ、魔法破らった」

ていうな悟つて、自分が白鳥になつて、パタパタ、パターツて、いずこへともなく飛んで行つてしまつたんだけどはあ。どんびんからりん、すつからりん。

56 酒 飲 み

364

むかしむかし、あるどこき、酒好きで朝のんでいたい人、いだんだけど。ほして田でも畑でも、

「あそこは何升、あそこはなんぼがな」

て、みな酒に見えるんだど。売つてやるもの、米でも、「これは何升がなある。何斗がなある」て、銭でなくて、みな酒に見える人いだつたど。

ある時、となり村さ用達しに行つて、酒御馳走なつたげんども、つうと足んねくて、いそいで家さ来て、

「こりや、こりや、酒出せ」

て、言うた。

「うーう、酒ばり飲んでけずがっから」

ていうわけで、母親と奥さんが、米のとき汁の白水飲ませた。茶碗さ汲んでき
て飲ませたれば、ドクドク、ドクドクで飲んでいだっけあ、

「いま一杯」

また白水汲んできて飲ませた。ドクドク、ドクドクで、たちまち飲んでしまつ
て、「もう一杯」て言うた。

「こだえ飲むだいのだら、仕方ない、かかあ、汲んできて飲ませろはあ」

て、ばんちや言うたつた。ほして仕方ない、昔はほれ、今みたい清酒じやろくなてない濁酒

なもんだから、濁酒汲んできて、三杯目もつて行つたらば、

「ああ、やつと酒の味してきた」

て言うたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

57 とぶろく造り

むかしむかしは酒造りは禁止さつでいた。飢饉などばりあるもんだから、蓄えておかんなね。米、勝手に搗くことまかりならんというわけで、どこの村さも酒役人ていうな時々きて、ほして造つたな見つけられつど、百叩きとか、十日人足、二十日人足、叩がっだ他人足とられる。今ならば懲役何か月、罰金なんぼていうみたいなもんだつたど。ほいつ、ほれ大変なもんだから。

んだげんども、やっぱり百姓は稼いできて、夕方一杯ていうな何より楽しみだつた。ほして疲れも直るもんだから、どこの家でもこつそり造ることにしておつた。ほして酒改め来た時、「酒改めきた」ていうど、悟られっから、女衆のもの何でも廻す、炊事のもの。これは下き置くことなし、留守中の家ははぶして、どんどん、

「どんどん廻す。たとえばフゴ、右と左さ廻る。向い合つてだ、道路の向いところち側と両方さ、へら渡つたり、フゴ渡つたりすると、「はいつとス」て行つて、「フゴ持したつす」て言うんだら、ほのフゴはたちまち廻る。こっちの方はへら行つたていうど、へら、ぐるぐる廻ると、

「あつ、酒役人が来た、かくせかくせ」
て言うど、みな隠すのが定法だったど。

ある時、林はずれさ酒役人が来て、ばんちやばりいだどこさ入つて来て、

「こらこら、ばんちや、酒造ったが」

「はい、造つてます、造つてます」

「何造った？んだらばほこさ案内しろ」

「はいはい」

ていうわけで、だんだんえ山の方さ行つた。

「こだえこつちさ造ったか」

「ほだつす」

「どうだ、ええあんばい出っか」

「いや、最近あんまりええぐ出ねのよ」

「ほだべあ」

「元糶悪れど、ええあんばい出ねんだも、あいつあ」

なて、酒役人とへらへらしながら、山二つばかり越して遠くさ行^{とか}った。そのうち
はあ、ヘラとフゴと廻^{まわ}ってしまった。ほうしたけあ、何見せつど思^{おも}ったけあ、

「かいつであんす」

て見せた、山竹の竹藪^{たけくさ}だった。

「なんだ、ばんちや、かいつあ竹でないか」

「何だど、お役人さま」

「なんだどて、酒て言うたんだ」

「いや、酒は法度だも造らんねっただな」

て、ばんちやの機転^{きてん}でやらっただけど。

「なんだ、竹では仕様ないっただな」

ていううち村中ぐるぐる廻ってはあ、すぱっと隠して一滴もなかった。ばんちや抜群の成績上げだっけど。どんぴんからりん、すっからりん。

58 ダバロク

367

むかしとんとんあつたずま。

やつぱりこの酒改め役人がある村さやって来た。ほうして、じんつあばりいだどさやってきて、

「じんつあ、じんつあ、どぶろく造っていねが、ここらにどぶろく造りしつたどこないが」

「ありあんす、ありあんす」

「ある？案内しろ」

「はいはい」

て言うて、じんつあ、案内するふりして、フゴとヘラ廻してしまった。ほうら、村中パツパ、パツパと置くことなしで、裏口から裏口、裏口からまた裏口さ、はいつは渡って行つて、喋るも何にもしねで、早いこと早いこと、ほの廻んなの、タツタ、タツタと村中廻る。

ほうしてずうつと上の方さ行つて、

「どこの家だ」

「ほこの家であんす」

「ほう、あそこの家で造つたが、名前何て言うんだ」

「あそこは長兵衛さんの家であんす」

「長兵衛か」

帳面さついで、ほしていきなり開けだれば、職人といっぱいして造つてだ。一生懸命造つてだ。

「何だ、何造りしつた、こりや、じさま。ドブロクはどこさあんなだ」

「何、旦那さま、ドブロク？ドブロクさあ、ここらで一人も造る人いねっだな」

「なんだ、ほんではこの造ったなは…」

「こいつあ、お百姓だの、馬喰が必要な、ダバロクであんす」

「なに、ダバロク、ダバロクでは仕様ないな」

麻縄なつて、昔はきりつとクツワンどこ、ええあんばい入るようにして、馬ば引張つて歩くようにするダバロクていう駄馬さ使うクツワがあつた。ほのダバロク拵えしつたどこさ連て行つた。ドブロクとダバロク、ええあんばい取り違えて呉で、ほの部落も無事だつたど。どんぴんからりん、すつからりん。

59 仙人と小間物屋

368

むかしむかし、とっても正直で働きの小間物屋いだけど。

ほの小間物屋、隣の村あるいはほの隣の村さ商人^{あきんど}行ぐ。ほして一背負い背負つて行つたれば、雨降つてきた。雨降つてきて、荷物はだんだえ重たくなる。濡れ

る。こりや困ったこと始まったと思つたれば、年寄つたじんつあ来て、

「おいおい、その若い者、おれば背負^{んぶ}つて、んじや（行け）」て。

いや、こだえ重たいな背負つた他、人一人背負つて行がんねと思つたげんでも、根が親切で正直な若者なもんだから、

「ほんでは負^{んば}らっしゃい」

ていうわけで、荷物の上さほのじんつあば乗せだらば、何と軽いこと、背負つたも背負ねも同じだった。タッタッタッタとずうつと行つて、少し平らなようなどこさ行つたれば、

「ここで降ろして呉ろ」

て言うた。ほしてほこさ降ろしたれば、

「いやいや、今まで背負つてもらつて御厄介なつたから、おれあ一つ御馳走すつから」

て言うわけで、腰から何だか竹筒^{つぼ}みたいな出したけあ、フウツと吹いだけあ、たちまち酒肴になつた。

「あらら、不思議なこともあるもんだ」

と思つて、ほして、まず、

「酒あがらっしゃい」

酒ばりではうまくないべからていうわけで、女出して、お酌とり。ほうしてこんどは何も食いものなくてはいまかないべて言うたけあ、鍋出して、ほの鍋はまた何でも出る鍋だ。お刺身ていうとお刺身、煮付けていうと煮付け、鍋からチョイチョイはさんで、ほの老人がごちそうした。不思議なこともあるもんだと思つて、「いや、御馳走さま」て、御馳走なつたれば、それはほこの山さ住んでいる仙人だつたど。ほして、お前はあんまり働き者で正直者だから、何かお前さ御馳走したいもんだと思つて、おれがこういう風にして出はつたんだて。ほして腹いっぱいなつたころ、こんどは、ほの、酒ばすうつと竹筒の中さ吸い込んで、女も吸いこんだ。ほしていろいろな物吸いこんだげんど、鍋だけはほこさ置いだ。

「ほの鍋、お前さ呉^けつから」

て言うて、ほの仙人はかき消すように居ねぐなつてしまった。ほしてほの鍋も

らつてきて、商人の若者は、何でも「出る」て言うたもの出て、大變しあわせに暮したけど。んだから正直に一生懸命働かなねもんだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

60 安達が原の鬼婆

369

むかしむかし、都の方の偉い人から密命うけて、お殿さまが腹弱い、常にいろいろなもの食つては当つた。ほら、腹痛くするていうては困つてだった。ところがそれさ腹の中さ入った子どもの生き肝、かいっ飲ませれば、殿の腹の病氣はたちどころに治るていうことを聞いて、ほして密命をきいて、奥州の国さある産婆が、はいっ採りに来るわけだど。

ほうして機会伺つていたげんともほの機会にめぐまんねで、ずらつと何年となく暮したんだとはあ。ほうしたれば、ある晩、ほこの一軒屋さ来て、とんとんと

戸叩く、ちよつとのぞつて見たれば、若い夫婦だった。ほしてほの若夫婦の奥さんの方が臨月、もう少しで子ども産なすような格好していた。

「はあ、いよいよ時期到来」

と、ぴいんと感じたほの産婆さんが、

「まず、上がらっしゃい」

というわけであげた。ほしていろいろ四方山話していて、何とかして、この奥さんの腹の中の子ども取り出して、生き肝とんなねと思つて、ほして一策を案じた。

「いや、腹大きい人ざあ、水のみだいもんだから、今夜、三人して飲む水ないから、谷間さ、どうか、三人使うだけ、汲み行つてもらわねべか」

て、その亭主ば水汲みにやつて、間もなく短刀を、腹大きい奥さんさ、ぶつ立てて、ほして殺しにかかったわけだ。ところがほの奥さんの方が言うには、

「あなた、もしかしたら、わたしの母親でないか、今を去ること、十年前、わたしが五つん時、密命受けて、みちのくの方さ行つたということ聞いて、旦那と

二人で、一目会いたくて尋ねて来たんだ。母親に殺されるおれはくやしくないげんども、きつとあなた、おれの母親でないか」

て、娘に言つて、どきつと産婆がして、「ああ、娘殺してしまった」と思ったげんども、仕方なくて、ほして、その前は忠義一途な産婆であり、女であつたげんども、それからいうものは一転して、悪女になって、人を殺したり人のものを盗ったりする鬼婆になったんだげどはあ。んだから安達が原の鬼婆というな、元々悪人ではなかつた。元は殿さまの密命受けて、ほして殿さまの薬とりに来たんだって、はいつそういうことがあつてから一転して悪女になって鬼婆になっただけ。どんびんからりん、すっからりん。

蛤 姫(上)

佐藤家の昔話(八)

昭和五十年四月一日 印刷発行

話者 佐藤孝一

上山市榑下

編者 武田正

南陽市三間通二三二の三

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

蛤 姫（上） 佐藤家の昔話（八）

＊本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

但し、原本の巻末に付された話型対照表は省略しました。

平成二十三年七月三十日

東北文教大学短期大学部民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

東北文教大学・同短期大学部附属図書館内

（電話）〇二三―六八八―七五四四